

令和7年度

第32回

世田谷区小学生海外派遣事業

報告書

世田谷区教育委員会

目次

| | | | |
|---|----------------------|-------|-----|
| 1 | 小学生海外派遣事業について | | …2 |
| 2 | 区長あいさつ | | |
| | 世田谷区長 | 保坂 展人 | …3 |
| 3 | 教育長あいさつ | | |
| | 世田谷区教育委員会 教育長 | 知久 孝之 | …4 |
| 4 | オーストラリアの海外派遣を終えて | | |
| | オーストラリア派遣団 団長 | 栗林 大輔 | …5 |
| 5 | 「である」から「する」へ | | |
| | オーストリア派遣団 団長 | 依田 哲治 | …6 |
| 6 | 小学生海外派遣団 | | …7 |
| 7 | 学習会等日程表 | | …8 |
| 8 | オーストラリア団 報告 | | …9 |
| | (1)バンバリー市について | | …10 |
| | (2)日程表 | | …11 |
| | (3)写真 | | …12 |
| | (4)児童・引率報告書 | | …14 |
| 9 | オーストリア団 報告 | | …32 |
| | (1)ウィーン市 ドウブリング区について | | …33 |
| | (2)日程表 | | …34 |
| | (3)写真 | | …35 |
| | (4)児童・引率報告書 | | …37 |

1 小学生海外派遣事業について

1 目的

- (1) 海外派遣小学生として、訪問国の生活及び文化や伝統について自分の目で確かめ、肌で体験し、国際的視野を広める。
- (2) 外国で生活する人々や現地校の子どもたちとふれあい、人々の生活や文化に対する理解を深める。
- (3) 海外派遣を機会に、生活習慣の違いや日本の文化・伝統を見つめ直し、外国との違いに対する視野を広める。

2 令和7年度 事業概要

(1) オーストラリア団

- ◆ 日程: 令和7年10月30日(木)～11月7日(金)
- ◆ 団員: 統一公募の選考を通過した、区立小学校第5学年
- ◆ 派遣先: オーストラリア パース市、バンバリー市
- ◆ 人数: 14名
- ◆ 内容: ①学校訪問及び現地小学生、地域住民との交流
②訪問国での自然、産業、文化、歴史等の学習
③市長表敬
④訪問国でのホームステイ

(2) オーストリア団

- ◆ 日程: 令和7年10月18日(土)～10月25日(土)
- ◆ 団員: 統一公募の選考を通過した、区立小学校第5学年
- ◆ 派遣先: オーストリア ザルツブルク市、ウィーン市ドゥブリング区
- ◆ 人数: 16名
- ◆ 内容: ①学校訪問及び現地小学生との交流
②訪問国での自然、産業、文化、歴史等の学習
③区長表敬

2 区長あいさつ

世田谷区長 保坂 展人

世田谷区は、ウィーン市ドゥブリング区とは昭和60年（1985年）、バンバリー市とは平成4年（1992年）に姉妹都市提携を結びました。小学生派遣においては、初めての派遣が平成3年（1991年）から始まり、今回で32回目の実施です。

まずは世田谷区の子童のみなさんが、元気に派遣期間を過ごせたことを大変嬉しく思います。派遣先では、表敬訪問のほか、学校訪問での現地児童との交流や週末に滞在したホームステイ体験などをおして、バンバリー市およびウィーン市ドゥブリング区の心温まる歓迎を受けたと聞いています。現地ならではの生活や文化、考え方・価値観を肌で感じ、理解するとともに、日本の生活や文化を見つめ直す貴重な機会になったのではないのでしょうか。



みなさんは、「姉妹都市との架け橋」という、区の代表として重要な役割をしっかりと担ってくれました。今後、世田谷区でも外国人住民の増加や多国籍化が見込まれる中、みなさんがこの取組みで学んだことや経験をぜひ学校や地域へ生かして行ってください。

そして、世界を視野に入れながら、今後の学校生活や人生を充実させていってほしいと思います。この経験が、みなさんにとって国際社会で活躍していくうえでの貴重なステップとなり、更なる成長につながることを期待しています。

最後に、バンバリー市では、ミゲル市長および市の関係者のみなさま、ウィーン市ドゥブリング区では、レッシュ区長および区の関係者のみなさま、それぞれで訪問を受け入れていただいた現地校の先生方には大変お世話になりました。

そして、引率の先生方をはじめ、各小学校の先生方、保護者のみなさま、区内関係者のみなさまのご協力に心から御礼申し上げます、私の巻頭の言葉とさせていただきます。

3 教育長あいさつ

世田谷区教育委員会 教育長 知久 孝之

世田谷区では、あらゆる国や地域の人々との交流や多様な文化に触れる機会を通して、語学力のみならず、相互理解や価値想像力、社会貢献意識などを高め、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、地球規模の視野をもち、グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成を図っています。



今回、公募により多数の応募者の中から選抜された区立小学校5年生の代表児童は、バンバリー市やウィーン市ドゥブリング区を訪れるにあたり、自分が興味を持った研究テーマを設定して事前・現地・事後の学習を通じて探究的な学びを体験することができました。今後、美しいインド洋に面した豊かな自然や世界に誇る芸術文化に触れ学んだ経験を一人でも多くの方に伝えることで更に高次の学びへと昇華させ、これからの人生を自分らしく豊かに生きる糧とすることを期待しています。

また、派遣先では、表敬訪問のほか、現地学校での交流やホームステイ体験など、バンバリー市およびウィーン市ドゥブリング区のみなさんから温かい歓迎を受けたと聞いています。この現地でしか得られない貴重な経験を活かし、これからの国際社会で国籍や文化、言語の違い等に関わらず多様性を認め合い誰もが平和的に暮らせる社会の構築のために活躍していくことを強く願っています。

結びに、この海外派遣に際し、多大なるご協力をいただきましたバンバリー市のミゲル市長、ウィーン市ドゥブリング区のレッシュ区長、日程等の調整にご協力をいただいた姉妹都市委員会や現地担当者の皆様、訪問を受け入れていただいた現地校の校長先生をはじめとする関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。また、代表児童の派遣にご理解、ご協力を賜りました保護者の皆様及び小学校校長会、各小学校の先生方、そして引率の先生方に深く感謝申し上げます、あいさつといたします。

4 オーストラリアの海外派遣を終えて

オーストラリア派遣団 団長 世田谷区立明正小学校 校長 栗林 大輔

10月30日、世田谷区役所にオーストラリア派遣団の子どもたちが元気に集合しました。6月から学習会を重ね、挨拶や出し物の準備とともに、仲間の結束を高めてきました。長い移動時間にも関わらず、子どもたちは元気に過ごしてくれました。遠い異国の地でもバディの仲間を中心に助け合い、励まし合ってくれたからだと思います。



9日の間にたくさんの貴重な体験をしました。バンバリー市のワイルドライフ公園では、大きなインコに直接エサをあげ、大興奮でした。98%の確率でイルカが見られると船に乗り込んだドルフィンディスカバリーセンターでのガイドツアー、波に乗るたくさんのイルカを見ることができました。コフナコアラパークでは、身長制限が心配でしたが無事に全員がコアラを抱くことができました。コアラは思ったよりもずっしりと重く、毛がゴワゴワと硬かったそうです。Carey Park Primary school と St Marry's Primary school への訪問は、現地の子どもたちと授業を一緒に受けるとともに、綱引きや縄跳びをしたりランチを一緒に食べたりして交流を深めました。言葉はなかなか通じなくても、身振り手振りや「伝えたい!」という気持ちで関わっていく子どもたちに頼もしさを感じました。消防団の人たちからは、山火事から自然を守るためにボランティアで訓練を重ねる思いを聞くことができました。シニアセンターの訪問では、急なリクエストに応じて「君が代」を歌ったり、歌詞カードを貸してもらってカントリーソングを歌ったりしました。

そして何よりホームステイをした3日間は、子どもたちを大きく成長させてくれました。どの家族も子どもたちを温かく受け入れてくださり、ビーチで泳いだり、公園に行ったり、バーベキューをしたり、野生のカンガルーやエミューに出会ったりとたくさんの経験をしたそうです。私は13年前にも海外派遣団としてバンバリー市を訪れ、ホームステイをしました。ホームファミリーのご厚意で、前回、お世話になったご夫妻と出会うことができました。会った瞬間に時間が戻り、再会を喜び合いました。長い間、連絡をしていなかったのに、喜んでくれる二人に涙が出てしまいました。どの子たちも「私のホームステイファミリーが最高!」と話していました(私は自分のファミリーが最高だと思っています)。短い3日間でしたが、子どもたちにも新しい家族ができました。これからも交流を続けてくれることを願っています。

今回の派遣にあたり、子どもたちのご家族や、各校の校長先生をはじめとする学校関係者の方々にはご理解ご協力をいただきありがとうございました。また、子どもたちを温かくご指導いただき、見守ってくださった猪又先生、林先生、きめ細かくご配慮いただいた添乗員の鈴木さん、いつも子どもの様子を気にかけてくださった小池さんにお礼を申し上げます。

派遣団の子どもたちと大人たちの素晴らしいチームができあがりました。共に助け合い、同じ時間を過ごすことで、最高の経験ができました。この経験を生かし、これからもいろいろな人々と力を合わせて人生を歩んでほしいと思います。

5 「である」から「する」へ

オーストリア派遣団 団長 世田谷区立東玉川小学校 校長 依田 哲治

ザルツブルクとウィーンをめぐる六日間の派遣で、子どもたちは歴史と文化の重みを全身で感じ取っていました。ホーエンザルツブルク城の石壁の厚み、ミラベル庭園の整然とした美しさ、モーツァルトの生家に満ちる静けさ。どの場面でも、荘厳な建築や壮大な庭園の規模に息をのむ姿がありました。しかし、ヨーロッパの歴史や文化に関する知識とのつながりはまだ薄く、見学したことの意味や成り立ちを自分の言葉で語るには至らない様子も見られました。



けれども、それでよいのだと思います。大切なのは、「見た」ことを「知っている」で終わらせず、「感じた」ことから「自分は何をするのか」を考えることだからです。歴史の重みを前に静かに立ち止まる体験は、「である」世界を受けとめる第一歩です。その先に、「する」世界へと踏み出す勇気が生まれます。

今回の派遣は、「歴史を学ぶ」だけでなく、世界の文化や生活、考え方を学ぶ機会でもありました。ジェンダーフリーやSDGs、音楽教育などを自分のテーマとして、現地での見聞を通して新しい視点を得た児童もいました。異なる文化や価値観にふれる中で、「自分はこの社会で何ができるだろう」と問いをもつ姿が見られました。知識や答えを持ち帰る旅ではなく、問いを抱えて帰る旅になったことに、大きな意義を感じます。

また、現地の人との交流では、確かな手応えを感じていました。練習してきたソーラン節を披露した際、ドゥプリング区長も笑顔で称賛してくださいました。さらに、マリア・レジーナ校での発表では、現地の同学年の児童が舞台上に飛び出してきた、一緒にソーラン節を踊りました。日本の文化や子どもたちの誠意が相手にも伝わり、あたたかなつながりが広がる瞬間を味わいました。

現地の子どもたちに教えてあげようと練習していった折り紙も好評でした。できあがった折り紙を見て笑顔を見せるオーストリアの仲間を、さらに笑顔で見つめる日本の子どもたち。言葉を超えて気持ちや伝え合う喜びを体感していました。紙飛行機も人気があり、ついには中庭でみんなが作った紙飛行機を一斉に飛ばす試みにもつながりました。現地で生まれた偶然のワクワクが、言葉や文化の壁を越えて、みんなの心をひとつにしました。

さらに、英語を使って現地の子どもと直接会話を楽しむ姿もありました。英語で自分の思いを伝え、相手の言葉を理解しようとする姿に、子どもたちは自信を得ていました。中でも、積極的に話しかけた児童の笑顔はひとときわ輝き、満足感に満ちていました。まさに自己肯定感が爆上がりした瞬間でした。言葉を超えたつながりも大切ですが、言葉を通じたつながりの力、相手と真正面から向き合うコミュニケーションの尊さを実感したと思います。おそらくどの子も、語学を学ぶことの意味を肌で感じ取ってきました。

今回の派遣は、児童それぞれが新たな一歩を踏み出す機会になりました。世界に踏み出す第一歩であると同時に、自分の未来をつくる自信を得た旅となりました。そして、見たことを語り、感じたことを動かし、つながりを広げていく。その連鎖こそが、未来を創る力になると信じています。

6 小学生海外派遣団



7 学習会等日程表

| 回数 | 日時 | 会場 | 実施内容 |
|----|----------------------------------|----------|--|
| 1 | 令和7年6月15日(日) 午前10時30分～午後0時30分 | 教育総合センター | 派遣決定通知書 交付式 教育長あいさつ 第1回 学習会 (派遣団別オリエンテーション) 第1回 保護者説明会 |
| 2 | 7月20日(日) 午前9時30分～午後0時30分 | 教育総合センター | 第2回 学習会 国際理解のためのワークショップ 第2回 保護者説明会 |
| 3 | 8月24日(日) 午前9時30分～午後0時30分 | 教育総合センター | 第3回 学習会 挨拶・アトラクション練習 学習テーマ確認 |
| 4 | 9月21日(日) 午前9時30分～午後0時30分 | 教育総合センター | 第4回 学習会 挨拶・アトラクション練習 学習テーマ確認 第3回 保護者説明会 |
| 5 | 10月12日(日) 午前9時30分～午後0時30分 | 教育総合センター | 第5回 学習会 挨拶・アトラクション・決意表明準備 第4回 保護者説明会 出発式 |
| 6 | 11月16日(日) 午前9時30分～午後0時30分 | 教育総合センター | 第1回 帰国後学習会 派遣振り返り 報告書、発表資料 確認 |
| 7 | 令和8年1月18日(日) 午前9時30分～午後0時30分 | 教育総合センター | 第2回 帰国後学習会 発表資料 確認 報告会 練習 |
| 8 | 3月1日(日) 午前10時～午後3時30分(予定) | 教育総合センター | 報告会 |

8 オーストラリア団 派遣報告



(1) オーストラリア バンバリー市について

バンバリー市は、西オーストラリア州の州都であるパースから約180キロ南にある港町です。広大なインド洋に面し、19世紀後半のゴールドラッシュ時代の様子を今に伝える建物が残る、美しい街並みが続いています。町のすぐ近くに白い砂浜が広がり、クーンバナビーチでは、近辺までやってくる野生のイルカに出会うことができます。郊外へ行くと、ユーカリの森の中で、野生のカンガルーやユニークな形のワイルド・フラワーを見ることができます。



■バンバリー市の概要■

面積:約 65km²

人口:約3万2千人

東京からの所要時間:約 13 時間 (マレーシアおよびパース経由)

東京との時差:-1 時間

世田谷区の小学生がバンバリー市を訪問したことがきっかけで、1992年11月に両都市は姉妹都市の提携を行いました。それ以来、両都市における小学生派遣が毎年※行われています。そのほかにも、スポーツ分野や芸術分野における交流も行われています。

※…世田谷区からの派遣は令和2年～令和4年度、バンバリー市からの派遣は令和2～5年度は行っておりません。



(2) オーストラリア団 日程表

| | 月日 (曜日) | 発着地/滞在地 | 現地時間 | 交通機関 | 内 容 |
|---|---------------|---|--|----------------------------|--|
| 1 | 10月30日 (木) | 区役所発 成田発 クアラルンプール着 クアラルンプール発 パース着 | 05:00 05:15 10:05 17:00 19:50 01:25 | 専用バス 航空機 航空機 専用バス | 区役所集合、出発 羽田空港又は成田空港へ マレーシア航空にてクアラルンプールへ クアラルンプール到着後、乗り継ぎパースへ マレーシア航空にてパースへ 到着後、専用バスにてホテルへ パース ホテル泊 |
| 2 | 10月31日 (金) | ホテル発 バンバリー着 | 11:00 14:00 15:30 16:00 19:15 | 専用バス | ホテル発 昼食 バンバリーワイルドライフパーク 市長表敬 ホームステイ家族との対面 ～ ホームステイ ～ |
| 3 | 11月1日 (土) | バンバリー滞在 | 終 日 | | ホストファミリーとの終日フリータイム ～ ホームステイ ～ |
| 4 | 11月2日 (日) | バンバリー滞在 | 終 日 | | ホストファミリーとの終日フリータイム ～ ホームステイ ～ |
| 5 | 11月3日 (月) | バンバリー滞在 | A M P M | 専用バス | ホストファミリーとのお別れ 世田谷のミーティングタイム オーストラリアンフットボール体験 ビッグスワンプ 学校訪問① 昼食 シニアコミュニティセンター 消防署訪問 ホテルにチェックイン バンバリー ホテル泊 |
| 6 | 11月4日 (火) | バンバリー滞在 | A M P M | 専用バス | ホテル発 公園散策 学校訪問② 昼食 ライフセービングクラブ訪問 姉妹都市委員の方々とBBQ デイナー バンバリー ホテル泊 |
| 7 | 11月5日 (水) | バンバリー発 パース滞在 | A M P M | 専用バス | ホテル発 ウォーキングアートツアー ドルフィンディスカバリーセンター 昼食 モーターミュージアム バンバリー出発 ホテル着 夕食 パース ホテル泊 |
| 8 | 11月6日 (木) | パース滞在 | A M P M 22:00 | 専用バス | ホテル発 コフヌコアラパーク フリーマントル散策 昼食 水族館(AQWA) モンガー湖 キングスパーク サウスパース、パース夜景見学 夕食 パース空港へ |
| 9 | 11月7日 (金) | パース発 クアラルンプール着 クアラルンプール発 成田着 区役所着 | 02:25 07:55 09:40 17:30 19:30 21:30 | 航空機 航空機 航空機 専用バス | マレーシア航空にてクアラルンプールへ クアラルンプール到着後、乗り継ぎ成田へ マレーシア航空にて成田へ 到着、入国審査、通関手続 世田谷区役所 帰国式後、解散 |

(3) オーストラリア団 写真



成田空港



消防署



シニアコミュニティセンター



St Mary's Primary School



Carey Park Primary School



ドルフィンディスカバリーセンター



市長表敬



ライフセービングクラブ



ワイルドライフパーク



市内ビーチ



バンバリーモーターミュージアム



オーストラリアンフットボール

(4) オーストラリア団 児童・引率報告書

○児童報告書(五十音順)

- ・ I.S. 「ホームステイを超えて」
- ・ O.M. 「オーストラリアの自然と人々」
- ・ K.H. 「オーストラリアで学び、日本の未来に生かしたいこと」
- ・ K.K. 「楽しかった9日間」
- ・ K.I. 「宇宙開発とホームステイ」
- ・ S.Y. 「行って分かったオーストラリアの自然」
- ・ S.N. 「見つけた!オーストラリアの『あたりまえ』」
- ・ S.M. 「折り鶴で学んだオーストラリアの文化」
- ・ T.S. 「オーストラリアと日本の違いについて」
- ・ T.T. 「『関わりたい』は世界をこえて」
- ・ N.C. 「アボリジニ文化と繋がる学校訪問」
- ・ F.S. 「オーストラリアの人たちから学んだこと」

・ M.M. 「My Bunbury, Australia-私の体験記」

・ M.S. 「緊張から感激へ バンバリーでの出会い」

○引率報告書

・引率 京西小学校主幹教諭 猪又 菜都子 「日々学び、つながる喜び!」

・引率 希望丘小学校主任教諭 林 美沙季 「チャレンジした先に」

ホームステイを超えて

I.S.

僕がオーストラリア派遣に挑戦したいと思った大きな理由の一つに、「ホームステイができる」がありました。理由は言葉も文化も違う他の家族の人と過ごしてみたい、何を食べてどのような生活をしているのか知りたかったからです。

ホームステイの時の会話は、google も使って伝えようとしてくれたけど「僕たちはもうだいな資産を持っています」と間違った表現が出てきて機械の限界を感じ、しっかりと喋れなくて悔しかったです。でも生活は「クリケット ok」「イエス」「マイグランドファザー フィッシング ベリーグット」と僕の知っている単語を使いながらコミュニケーションを取ることができました。またお父さんも一緒に紙風船で大騒ぎしながら遊んだので仲良くなれました。たとえ言葉が違ったとしても相手の表情を見ながら話したり一緒に何かをすることで伝わるんだと思いました。



僕のホームステイ先の朝ご飯は、パンと庭に行き行って産まれたての温かい卵を使った目玉焼きです。お昼ご飯は、太いフランスパンにガボチャスープ、このスープにはチーズをすって入れて食べるのですがこれがトロトロしていてとても美味しかったです。夜ご飯は、フィッシュアンドチップスとカニやオニオンを揚げたものを海岸で食べました。全部忘れられない美味しさでした。お腹いっぱいになったけれど「えっこれだけ」と思ってしまいました。やっぱり日本はバランスの良い食事だと感じたし、僕は「野菜たっぷり入ったお味噌汁が食べたーい」と思ってしまいました。オーストラリア人の体が大きいのはこの食事も関係しているのかもしれませんが。

オーストラリアに行きたかった二つ目の理由が、建物のデザインを見て将来につなげることでした。印象的だったのは家がとってもカラフルだったことです。オレンジや黄色、特にホームステイのお家はピンク色でした。東京だと周りの人達の事を考えてあまり派手にしていないからびっくりするけどオーストラリアでは、僕もしてもらったけど、相手の思いや考えを大切にしてくれるし、広く青い空と、豊かな緑の中にカラフルな家が馴染んでいて素敵でした。あと驚いたのがすごく解放感のあるトイレです。本当に板があるだけだったのでびっくりしましたが日本のトイレは、他の人との間があって、落ち着きました。これも人とのほどよい距離感がある日本の良さだと思いました。

僕はこの海外派遣で、日本と比較する国が増えました。そのことで、日本ならではの良さに気づきました。

僕は、人間のために生き物をどうするかという考えだったが、生き物のために人間がどう行動するのかという考え方を知り、違った考え方をすることによって選択しが増え、行動が変わるんだなと思いました。

相手の考えを大切にできることって素敵だなと思いました。もっと話したい、もっといろんな国に行ってみたいと思いました。

オーストラリアの自然と人々

O.M.

私がオーストラリアに行って1番印象に残ったのはバンバリーの自然です。また、海外派遣事業に参加する際、オーストラリアを選んだ理由もバンバリーの自然に興味があったからです。そして、オーストラリアのバンバリーに行ったことでオーストラリアの自然は綺麗だと体験しながらたくさん感じる事ができました。その中でも特にバンバリーの自然が美しいと思った場所が2つあります。

1つ目は、ホストファミリーに連れて行ってもらったビーチです。事前に行った学習会でバンバリーについて調べると、バンバリーのビーチはゴミなどが無くとても綺麗だと書いてありました。それを知り、オーストラリアに行く際、バンバリーのビーチを見る事が私の中での



真ん中が私です。

ひとつの目的でした。そして、ホストファミリーと過ごした3日間の内、2日目にバンバリーのビーチに連れて行ってもらいました。実際にビーチを見るととても綺麗でした。日本のビーチと比べてみると、日本のビーチは砂浜や海にゴミが落ちていることがありますが、バンバリーのビーチには砂浜にも、海にもゴミが落ちていませんでした。この違いは、バンバリーの人と日本の人の自然への考え方が違うからだと思いました。

2つ目は、パースのキングスパークで見た花園です。キングスパークの花園には、いろいろな種類のお花が咲いていました。私の中でもカンガルーポーというお花が印象に残りました。カンガルーポーは、形がカンガルーの前足に似ている「カンガルーの前足」という意味の名前のお花です。その時、ガイドさんに「黒いカンガルーポーは、珍しいんだよ」と教えてもらいました。また、カンガルーポー以外にもキウイのようなとげがはえた植物や硬い実のついた大きい木などがありました。そして、キングスパークの花園には英語で「花壇の中には入らないでください。花は優しく触ってください。」という看板が置いてありました。日本では、花壇の中には入らないでくださいという看板は見かけることがよくあります。ですが、花は優しく触ってくださいという看板は日本にはあまり無いと思いました。そのため、看板を見た時私はとても驚きました。この看板にもオーストラリアの人々の自然を大切にしたいという考えが現れていると思いました。

私は、今回オーストラリアに行ってオーストラリアの人々、バンバリーの人々が自然を大切にしていることに知って、この考え方を学校や地域、さらに日本に広めたいです。オーストラリア団のみんなとオーストラリアについて楽しく学べてよかったです！

オーストラリアで学び、日本の未来に生かしたいこと

K.H.

私が今回オーストラリアの海外派遣を希望した理由は、環境保護や生物多様性を守るために、積極的に取り組んでいる国のため、その具体的な取組を実際に目で見て、肌で体験して、詳しく学びたいと思ったからです。私は今回、バンバリー市とパース市に滞在し、たくさんのことを経験しました。印象に残ったことを4つ紹介したいと思います。

1つ目は、水族館で学んだことです。事故で片手を失くしてしまった亀の話や、クラゲを餌にするために、ビニール袋を間違えて食べてしまい、消化でき

ず死んでしまう亀が多いことを飼育員の方に聞きました。水族館に来た人に、美しい生き物を見せるだけでなく、生き物の苦しみも話をしたり、また生き物を守るための対策を伝えたり、生き物の声も伝えることはとても大切なことだと気づきました。

2つ目は、消防団の方から聞いた話です。オーストラリアでは過去に起きた森林火災で、たくさんの土地が焼け、多くの野生動植物が死んでしまったことに私はとても驚きましたが、オーストラリアは暑いので、木の葉等が太陽の熱で燃え、それが燃え広がり、森林火災につながることもあるそうです。人間が家事を起こすと家が焼けてしまうだけでなく、オーストラリアには自然がたくさんあるので燃え移りやすいから、人間がまず火事を起こさないように気を付けることも大切だと聞きました。日々の生活の中で気を付けられることを考えることの大切さも知りました。

3つ目は、オーストラリアの人たちの心構えです。ホームステイのホストファミリーに、私はバンバリー市の海に連れて行ってもらいました。海はとても美しく、砂浜にあるのは貝殻や海藻だけで、海辺にゴミなどがいっさい無いことに私はとても感動しました。オーストラリアの海をきれいに守っているのは、そのようなお仕事があるからではなく、住んでいる一人一人が誰かに言われたからでもなくて、生き物や自然を守るために行動しているからだを知り、日本でも実践できたらいいなと思いました。

4つ目は、なるべく自然な材料を使って生活をしたり、街づくりをしたりしていることです。ホストファミリーのお父さんは、バンバリー市で公園をつくる仕事をしていて、私はお父さんが作った公園に連れて行ってもらいました。なるべく木材等の自然な材料を使ってブランコ等の遊具を作り、周りに自然に溶け込んだ公園がとても素敵でした。また、私がお土産に買ったタンブラーはプラスチック製ではなくて、Bamboo Cupと書いてありました。一緒に買ったストローも日本で見かけないのでガラス製でした。使ってみてとても飲みやすく、何度も使えてよいアイデアだと思いました。

9日間は毎日とても楽しくて、あっという間でした。英語が話せたらもっといろいろなことをオーストラリアの人に聞いてみたかったです。派遣団の仲間と一緒に過ごした時間や学んだこと、出会った人々との思い出は私の一生の宝物です。この経験をたくさんの周りの人たちに伝えたり、将来にも生かしていきたいと思っています。ありがとうございました。



楽しかった 9 日間

K.K.

僕は、オーストラリアの海外派遣で、たくさんのことを体験し、学ぶことができました。特に印象に残った3つを紹介します。

まず1つ目は、ホームステイです。僕のホストファミリーは、14歳の女の子と、11歳の男の子がいる家族でした。犬やにわとり、うさぎやインコなど、たくさんの動物を飼っていて、毎朝、飼っているにわとりが産んだ新鮮な卵を食べました。また、「ベジマイト」というものをパンにぬって食べていました。「ベジマイト」はオーストラリアの国民食と言われています。僕も食べてみましたが、とてもしょっぱかったです。オーストラリアの赤ちゃんはみんな、ベジマイトをたくさん食べて成長するらしいです。また、ホストファミリーが自然にとても親しんでいたことも印象に残っています。海では砂浜遊びや、釣りをしました。山でのブッシュウォークでは日本では見たことがない植物や、虫、トカゲ、ヘビなどを見ました。ホストファミリーと一緒に遊んだり出かけたり食事を共にして、仲良くなれたことが楽しく思い出に残りました。



2つ目は、環境問題について学んだことです。オーストラリアでは水不足のため、湯船を使わずにシャワーを使うことは知っていました。しかし、ホストファミリーの方から飲み水をいただいたときに、雨水を再利用していると聞いてとてもおどろきました。

また、バスの中から周りの様子を見ていると、屋根の上にソーラーパネルがとても多く、3軒に1軒くらいの割合で設置されていました。オーストラリアは晴れが多く、日差しが強いのでそのことを活かして発電をしているのではないかと考えました。ほとんど晴れていて雨があまり降らないオーストラリアは、水不足という環境問題がありますが、反対に太陽光発電がしやすいという側面もあります。日本でも環境問題とと思っていることが、よく考えると何か別の環境問題を解決する手がかりになるかもしれないと思いました。

3つ目は、学校訪問についてです。一番おどろいたことは、教科書を使っていないことです。訪問先の学校では YouTube を観てダンスをしたり、日本語の授業ではベジマイトを実際に食べて「ベジマイトはおいしいです」と日本語で言ったりしていました。そして、教科書に沿って授業をするのではなく、先生がそのクラスの生徒の成長に重要だと思うことを教えていました。また、校庭がとても広く、バスケットコートがあるグラウンド、アスレチックエリア、遊具エリア、芝生が辺り一面広がっているところと、どこもとても広く、休み時間にのびのびと遊べました。

今まで親と長い期間離れることがなかったので不安もありましたが、一緒に行った海外派遣の友達と過ごすうちに、どんどん仲良くなり、最終的に不安がなくなりとても楽しい9日間になりました。オーストラリアで学んだ環境問題の取り組みについて、もっと勉強し、みんなに伝え、日本を環境にやさしい国にしていきたいです。

宇宙開発とホームステイ

K.I.

今回の海外派遣で、僕は「オーストラリアの人たちと良い関係を作るために大切なことを考え、実践する」を目標にしました。これを目標にしたのは、僕は将来ロケットを作る仕事に就きたいと思っており、ロケット開発では外国の人たちと協力して行うこともあるため、そのために必要なことを学びたいと思ったからです。オーストラリアの人たちとの交流で学んだことは三つあります。



左から2番目が僕です。

一つ目は、相手のことを事前に知っておくことです。オーストラリアに行く前にホストファミリーの顔や名前、趣味などを覚えていたので、複数のホストファミリーが迎えにきてくれたときに、自分のホストファミリーをすぐに見つけて、自分から挨拶に行くことができました。また、ホストファミリーの趣味を覚えていたので、それについて話すことができ、初対面でも会話が盛り上がりました。さらに、英語圏では、会話の文末に相手の名前を添えると親しみが湧くと言われているため、名前を覚えて、会話のときに相手の名前を添えて話すようにしました。

二つ目に、感謝と親しみの気持ちを分かりやすく伝えることです。例えば、日本では知らない人がドアを開けて待っていて、「ありがとう」と言わないことが多いと感じていました。オーストラリアでは、このような場面でも「thank you」を頻繁に言う文化だと感じ、僕も真似をして言ってみました。また、現地の人々がバスの運転手などに握手を求めている様子を見て、お世話になる人に対して自分から握手をする文化があると気づきました。それをまねして、学校訪問で案内してくれた子やバスの運転手さんなど、出会った方々に自分から握手をしてみました。すると、相手との距離が縮まったように感じ、日本との文化の違いや良さを実感できました。

三つ目に、英語がうまくなくても諦めないでコミュニケーションを取ろうとすることです。例えば、ホストファミリーとビーチへ行くための準備をしている時に、ホストマザーが言っていることが分かりませんでした。そこで、「swimsuit」などの知っている単語から推測し、ちょっとぎこちない英語で「I need bring swimsuit and goggles?」と質問してみると、相手の言っていることが分かったので、自分の英語が通じたと分かり、自信につながりました。

この派遣を通して、言語の壁があっても、積極的にコミュニケーションを取ろうとすれば相手と良い関係を築くことができるということが分かり、実際にそれらを試すことができました。その結果、ホストファミリーから帰国後も手紙で連絡を取り続けようと言ってもらえるほどの、親しい関係を、二日間という短い時間で作れました。今後も、ホストファミリーにクリスマスカードなど季節のカードを送り、交流したいです。この学びを、学校で外国から来た子と出会ったときや、将来外国の人とチームでロケット開発をするときに活かしたいです。

行って分かったオーストラリアの自然

S.Y.

僕はオーストラリア派遣での学習テーマを、『日本とオーストラリアの自然の違いについて。オーストラリアの環境保護と配慮の対策の仕方について』にしました。

具体的にどんな対策をしていたかという点、海ではイルカに近づく時には、専用の資格がないと近づけないことを知りました。資格があれば30mまで、資格がなければ100mまでしか近づけないということです。ではなぜそんなルールができたのか？それは、船とイルカが衝突して、イルカがけがをするケースが増えていたからです。野生生物を守るための、オーストラリアの知恵です。



ほかにも、海岸沿いにはとても短い間隔でゴミ箱が設置されています。それは、ポイ捨てなどをして間違っウミガメなどがごみを食べないようにするためです。カメはよくクラゲを食べます。そのため透明なプラスチックをクラゲと間違えて食べてしまって、胃で消化できず、食欲がなくなり餓死してしまうからです。それを防ぐために人間が責任を果たさなくてはなりません。

次に山火事についてです。

オーストラリアでは、頻繁に山火事が発生しています。なぜ頻繁に山火事が起こるのか？それは、ユーカリにあります。ユーカリは、周りに植物が生えるとユーカリオイルというのを分泌して、そのオイルが陽にさらされると、自然発火してしまい、それによって山火事が発生します。ユーカリは賢い植物で、幹の皮の厚さが約5センチ分厚い皮に覆われていて、山火事でも耐えられる設計になっています。そして2019年に起こったオーストラリア最悪の山火事、通称ブラックサマーでは、消火活動を行っていた地元の方が33人犠牲となり、日本円で約3000億円の損失、様々な種類を含めて30億匹以上の生物が焼け死にました。焼失面積、約1860万ヘクタール、日本列島でいうと約半分が焼けたことになります。さらにCO2の排出量が4億トンといわれています。ブラックサマーが発生した原因は、2019年は特に降水量が少なかったことです。それに加えて乾燥もひどかったようです。

これが一年間続きました。この山火事が原因で、当時生息していたコアラの3分の1が焼け死に、三年前に絶滅危惧種に指定をされ、来年には抱っこができなくなるかもしれません。

今回学んだことを通して、日本でも同じようなことが原因の火事が起きていることから、僕は、可燃性のものを使うときは、最後まで責任をもって後始末を行い、小さなことから一大事のことが生まれないよう、細心の注意を払っていこうと改めて思いました。

そして人為的な災害を限りなく『ゼロ』に近づけられるように、後輩たちや周りの人に伝えていく役目をはたしていきます。

見つけた!オーストラリアの「あたりまえ」

S.N

私にとっての今回の海外派遣は、日本との「あたりまえ」の違いを探しに行く旅でした。たくさんあった日本との違いの中でも強く印象に残り、私がオーストラリアを大好きになった理由、それはオーストラリアの人の friendly さです。

例えば、バンバリーの市長さんに会いに行った時には、席に私たちを1人ずつ座らせて、ニッコニコの笑顔で一緒に写真をとってくれました。また、シニアコミュニティセンターでは高齢者のバンドが私たちのために演奏をしている最中に、101歳のおじいさん、おばあさんが急にペアで踊りだしました。ノリノリで踊る二人を見て、私は歳をとっても明るさ、friendly さがあつてとても素敵だな、と思いました。さらに、ホストファミリーとプールに行き、用意したおもちゃで宝探しをして遊んでいた時に、ホストファミリーのパパが知らない5歳くらいの男の子から『そのおもちゃ、貸して!』と言われました。パパは気軽に『いいよ!』と言って、男の子が飽きて返りに来るまでそのままにしていました。私は日本でこういう場面を見たことがなかったので、このような知らない人同士の friendly なやりとりが「あたりまえ」なんだなと驚きました。



町でよく見かける壁画は、見た人が絵のことについて話して他の人と繋がれるようにという願いで描かれたそうです。これは、オーストラリアの人の friendly さを作っている理由でもあると思います。もともと明るく friendly な性格があり、それを大切にしようと心がけているから、friendly な人たちがたくさんいるのではないかと思います。ホストファミリーや訪問した学校の子供たちなどオーストラリアで私が出会った人々はみんな friendly に優しく接してくれました。

他にも、野良カンガルーがいたり(野良ネコじゃない!!!)、ベジマイトという塩辛くてにがーいディップのピンがどの家にもあってみんなパンにつけて食べていたり、家も公園も空も海もきれいでとても広く、空気を吸って吐いてが気持ちよかったり、軽自動車が無かったり、家の庭に穴を掘ってトランポリンを作っていたり、オーストラリアの「あたりまえ」を思い出せばきりがありません。

この海外派遣で、私はホストファミリーやみんなに支えられて、日本のことを忘れてしまうほど充実した九日間を送れました。「あたりまえ」は国によっても人によっても違うけれど、その違いを知って認め合うことができるはずです。私は、日本でも外国でもどんどん自ら話しかけて、その国やその人の「あたりまえ」を知って理解し合いたい!!と思っています。

折り鶴で学んだオーストラリアの文化

S.M.

私は世田谷区の派遣団として10月30日から11月7日の9日間、オーストラリアに行きました。

私の一つ目の学習テーマは、「日本とオーストラリアの文化の違いや同じところを見つける」でした。文化の違いとしてはまず、ホームステイをした家の子ども達が裸足で過ごしていたことです。ビーチに行った後、車で家に帰るまでずっと裸足でいたことにとっても驚きました。派遣団の友達も同じことを話していました。次に、家の造りが気になりました。塔に登りバンバリーの住宅街を眺めた時、たくさんのレンガで造られた家が見えました。世田谷区と異なり、ほとんどが1階建てでした。先生に尋ねたところ「土地が広いので、1階建ては費用が少なく人気だそう」と説明してくれました。反対に、海や川が近いと2階建てにして良い景色を楽しむと教えていました。他にも、ホームステイをした家で、初めて犬に「おすわり!」と話しかけた時、通じませんでした。そこで英語で言ってみようと思って「sit down!」と言ったら通じました。動物にも英語で接しないといけないということがわかりました。



一方、日本と同じことは、日本の車がたくさん走っていたことです。ガイドさんが「日本の車は全体の6割で、特にトヨタやマツダが多い」と教えてくれました。バスの外にはホンダのお店が見えました。自動車ミュージアムを見学した時も日本の車がたくさんあって納得しました。しかし、スピードの基準は違いました。日本では標識が50くらいと書いてあります。けれども、オーストラリアでは80くらいと書いてあって驚きました。車に乗っている時、「やけに速いな」と感じ、標識を見てみると110と書いてありました。高速道路だったのかもしれませんが。パースの高速道路は無料でした。電車が盛んではないため、車での通勤・通学が多いみたいです。

二つ目の学習テーマは、「日本の文化を伝える」ことです。ホストファミリーに、和紙の折り紙を持って行きました。1日目に一緒に鶴を折りました。ホストファミリーはみんな、綺麗な紙を折ることが怖かったみたいですが、お姉ちゃんは私がいる間、毎日、鶴を折ってくれてとても嬉しかったです。棚が鶴でうまるほど、たくさん折って楽しみました。お姉ちゃんはバンバリーの派遣団として、世田谷に行って帰ってきたばかりだと教えてくれました。着物を着ている写真を見せてくれて、現地に行くとその文化を取り入れられるということがわかりました。

オーストラリアで実際に過ごして、私は海外の見方が変わりました。想像していたよりも英語が話せなくても、みなさん優しく接してくれました。そんなに恐れることはないと感じました。また、日本は広さのゆとりが少なく、慌ただしい気がしました。家を密集させずに道幅を広くし、緑をもっと増やせたらいいと思います。私は、この貴重な経験をサポートしてくれたみなさんに感謝し、これからの生活や勉強に生かしていきたいです。

オーストラリアと日本の違いについて

T.S.

私の学習テーマは、「生存している動物と触れ合い、どうやって保護しているのかを学ぶ」でした。オーストラリアに行って実際に分かったことは、いろんな動物を傷つけないために努力しているということと、ごみを減らす取り組みが進んでいるということです。

例えば、ドルフィンディスカバリーセンターでは、海の生き物の鑑賞だけでなく、海に落ちているゴミを拾い、環境を守ることが遊びながら学べる展示もありました。国全体が海に囲まれているため、海の環境を守ろうとする意識が強いのだと感じました。

また、怪我をしてしまった動物や、親を失った動物を保護する施設も多く、左腕を失ったウミガメや、病気で保護されたコアラがいました。特にコヌフ・コアラ・パークは 100 頭以上のコアラを保護する世界最大級の保護区で、実際に写真撮影もできました。

ごみを減らす取り組みはたくさんあり、動物園にはペットボトルを再利用したカンガルーの人形が売られていました。他にも、ポイ捨て防止で街のあちこちにゴミ箱が置かれていました。バンバリーに行って驚いたことは壁画がたくさんあることで、家全体が作品になっているもの、オーストラリアの先住民のアボリジニの人たちをイメージした作品などいろいろなものがありました。

一番の思い出はホームステイです。新しい素敵な家族ができました。ビーチに家が近かったので、何度かビーチに遊びに行きました。ビーチでは、旗を早く取った人が勝ちというルールの子供用ビーチフラッグなど日本ではあまりしない遊びをしました。この他にも、海の近くでディナーを食べたり、ホームパーティーをしたりしました。食事はパン食なのでハンバーガーが多かったです。ホストファミリーの方に「オーストラリアの食べ物は美味しいと思いますか？」と質問され、「美味しいです。」と答えたら「残念ですがオーストラリアの食べ物はあまり健康的ではありません。」と言われました。日本よりも味が濃いからだと思います。

つぎに、現地の学校についてです。学校訪問では現地の子ともと交流をしました。最初に行った学校では、「ハロ～」と声をかけると「こんにちは！」と日本語で返してくれ、とても驚きました。授業の体験は、オーストラリアのお菓子と日本のお菓子の食べ比べでした。オーストラリアのベジマイトというとてもしょっぱい調味料が塗ってあるクラッカーがあり、しょっぱすぎて少ししか食べられませんでした。ランチの時間になると、救急車のサイレンのようなチャイムが爆音で鳴りました。急に鳴ったので少し怖かったです。学校のランチはお弁当で、現地の子と車座になって食べました。昼休みはバスケットボールをやりました。みんな足が速くて、全然シュートできませんでした。日本の学校との違いは、校庭が広いこと、チャイムの音、ランドセルではなくリュックサックということでした。

最後に、ホストファミリーの方々、みなさん本当にありがとうございました。

この貴重な経験を将来に生かし、学んだことを皆に伝えていきたいと思っています。



1番左が私です。

「関わりたい」は世界をこえて

T.T.

みなさんは日本のアイヌ民族や琉球の独特な文化を知っていますか？

私が行ったオーストラリアにも、アイヌ民族のような先住民族がいます。アボリジナル(アボリジニとも言う)です。

オーストラリアに行く前、私はアボリジナルという先住民族がいるということだけを知っていました。

しかし、オーストラリアのバンバリー市に行って驚いたことがあります。街歩きで訪れた、「バンバリー CBD ミューラトレイル(壁画の小道)」やお土産屋さんに行った時のことです。

壁に描かれたたくさんの絵がありました。その絵の一つにアボリジナルの絵が。お土産コーナーをのぞいてみれば、アボリジナルの模様、デザイン、アートがたくさん。

街中にアボリジナルのアートやデザインがたくさん溢れていたのです。さらに、私が買ったお土産のパッケージにはズラッと英語が書いてあって、その英語を翻訳すると、商品のデザインをしてくれたアボリジナルアーティストの作品の説明と、「この商品の売上の一部を絵を描いてくれたアボリジナルアーティストに還元します。」と書いてあったのです。私はこのアボリジナルのアートやデザインが身近にあることやオーストラリアの人々がアボリジナルのことを大切にしていることにとても驚き、それに対する疑問も生まれました。日本と比べてなぜオーストラリアは、先住民族のことをこんなに大切にしているのだろう。

そこで私はバンバリー市のフェリシティさんにオーストラリアの歴史を教えてもらいました。

イギリス人がオーストラリアを植民地化しはじめたころ、アボリジナルがもともと持っていた土地を奪い取り、家族を引き離し、文化と言語を捨てろと言ってアボリジナルの人を差別しました。

最近になって、オーストラリアが歴史的な間違いを認め、国としてアボリジナルとの「和解」に向けて、アボリジナルの言語、芸術、物語を大切に守って広めていくようになりました。

私が買ったお土産も街中で見た壁画も、アボリジナル文化をたたえ、次の世代に残していくためのものだったと気づきました。

私は国をあげてアボリジナルを大切にするのは、過去の差別に対する反省と、これから人種を問わず、すべての国民で共に未来を築こうという思いが込められているからだとしてオーストラリアに行ったことで初めて分かりました。

最後に、私には海外派遣に応募するチャンスがあって、オーストラリア現地でもたくさんのチャンスがありました。ホストファミリーと英語で話してみたり、地域の学校で小学生と交流しました。そして、私はこの派遣で「いろいろな人と関わりたい、知りたい」の気持ちが一層強くなって、これからはさまざまなチャンスに挑戦してみたいと思いました。



左から2番目が私です。

アボリジニ文化と繋がる学校訪問

N.C.

私はオーストラリアのバンバリーに行くための目的は、アボリジニ文化について興味があり行きたいと思いました。作文と面接で受かった14人のみんなと九日間沢山勉強してきました。アボリジニ文化と繋がっている学校訪問について興味が湧きました。

そもそもアボリジニ文化というのはオーストラリアの先住民族であり、六万年前から受け継がれている世界最古の文化の一つです。今でもアボリジニ達は存在しています。

アボリジニ文化に興味を持った理由は、オーストラリアは「白人の国」と呼ばれていますがなぜでしょう？およそ六万年前にアボリジニが生まれました。しかし彼達は白人ではありません。

しかし、1770年にアボリジニの文化が一変します。ジェームズ・クックという、船長がオーストラリアを発見しました。ヨーロッパの船長であるクック船長はイギリスにいた犯罪者を流刑にしました。それでオーストラリアには白人が沢山増え「白人の国」と呼ばれるようになりました。その犯罪者達は増えていき、アボリジニの住む場所が取られてしまいました。ある日犯罪者の日記に「今日はアボリジニ狩りで17人やった」という日記が記されていました。ここから「アボリジニ狩り」が始まりました。他にもゴールドラッシュや移民制限法、白豪主義などがありました。1972年「ウィットラム」という人物が首相になり変化が起きます。その事からアボリジニ達もオーストラリアの人々として認められるようになり、そしてアボリジニという言葉も差別を思い出させるので、アボリジナルと言われたりもします。

その二つの学校には共通点があり、日本語の勉強をしていました。言語が違っててもジェスチャーや簡単な英語でわかってくれる優しさがあり、合図をしてくれます。その「友達になろう!」という気持ちがとても伝わってきます。男女関係なくみんな私たちとコミュニケーションを取ってくれます。学校訪問一つ目ではクリケット、綱引き、オーストラリアフットボール、鬼ごっこをやりました。ランチタイムの時にみんなが英語で「カモン!」と言ってくれました。写真の通り色々な国のことたくさん話しました。ランチタイムが終わった後みんなが鬼ごっこをやりました。私にとって最高の鬼ごっこでした!!学校訪問二つ目では算数の授業と縄跳び、オーストラリアのダンスをやりました。オーストラリアのダンスは4種類教えてもらいました。そして学校訪問を終え思いました。

私がこの海外派遣で、黒人でも白人でも差別がなく、みんなで仲良くする姿に感動しました。私達日本人のことも笑顔で受け入れてくれるオーストラリアの皆さんに感謝しています。この経験から、人との関わり方や関係を学びました。人と関わる時は、思いやりの心をもつことや、相手も受け入れて気持ちを理解することが大切だと思いました。9日間の経験を活かして、もっと友達と仲良く楽しく関わられるように努力をしたいです。そして、差別をせず、みんなで仲良くしていきたいです。

最高の経験ができ、またオーストラリアに行きたいです。



左が私です。

オーストラリアの人たちから学んだこと

F.S.

僕の学習テーマは、オーストラリアが大切にしている「多文化主義」についてです。

このテーマを選んだのは、代表委員の活動を通して、みんながもっと楽しく過ごせる学校を作りたいと思ったからです。そのヒントを見つけるために、オーストラリアへ行ってきました。そこで見つけた大切なことを二つ紹介します。

一つ目は、「自分の意見をしっかり持ち、相手の意見も大切にしながら話し合うこと」です。学校訪問のとき、オーストラリアの生徒たちは、自分の考えをはっきり伝えながら、相手の話もていねいに聞いていました。「そういう考えもあるんだね」と尊重していたのがとても印象的でした。また、ホストファミリーとどこへ出かけるか決める時も、子供たちはみんな行きたい場所、食べたいものを言い、そこから話し合いのスタートです！日本では、皆と同じ考えのほうがいいと思う人も多いけれど、オーストラリアでは「みんなが意見を言い合い、話し合いの中でベストをみつけていく」のが普通なのだと思います。ぼくもこれからは、いろいろな考えを受け入れながら話し合えるようになりたいです。



二つ目は、「たくさんの人と話すことの大切さ」です。ホストファミリーとショッピングに行ったとき、お店の人ととても仲良くなりました。なぜならたくさん会話をしたからです。オーストラリアの人達は、英語がわからない僕にもたくさん話しかけてきてくれます。話すことで相手のことを知り、自分のことも知ってもらえるのだと気づきました。学校でも、仲良しの友達だけでなく、いろんな友達ともっと会話をしようと思います。

このことを生かして学校では今まであまり発言しなかったけど積極的に手をあげて発言したり、沢山の人の笑顔で挨拶するようにしています。また、オーストラリアでは自然を大切にする気持ちにも感動しました。都会のパスでも木や花がたくさんあり、海をきれいに守る活動もしていました。ゴミ箱が多いのも、自然を守る工夫だと思いました。こうした努力が国全体のやさしさにつながっているのだと感じました。

訪問した小学校では日本の学校とは違うことがたくさんありました。授業ごとにクラス移動があったり、ランチタイムとは別で「スナックタイム！」があったり、日本語の授業では、バターを塗ったパンやティムタムというチョコレートスナックを食べながら、その味について日本語ではなしをするなど、とても楽しい授業がありました。是非日本の英語の授業でもやってみたいとおもいました。

この体験を通して、オーストラリアの人々の明るさや思いやりをたくさん感じる事ができました。僕も学んだことをまわりの人に伝え、自分の通う小学校や日本をもっとすてきな場所にしていきたいです。

オーストラリアですごした時間は、今まででいちばん楽しい思い出になりました。この経験を一生大切にしていきたいです。

My Bunbury, Australia - 私の体験記

M.M.

・旅のはじまり

10月にバンバリーから来た小学生と会う機会がありました。自己紹介は英語でできたけれど、相手の話はよく分かりませんでした。私は、バンバリー行きを楽しみにしていましたが、英語に不安があったのでどんな旅になるのか、その時は想像もつきませんでした。



1 番右が私です。

・オーストラリアに上陸!

着いてすぐに「とにかく広い!」とびっくりしました。世田谷区のように建物がたくさんないので、道がまっすぐ遠くまで続いていて広い自然が広がっていました。

・ありがとう!ホストファミリー

ファミリーのお家はとても大きくて、お庭の先は森につながっているようでした。小学校の校庭と同じくらいの広さでした。ファミリーは翻訳アプリを使って、緊張していた私たちを安心させてくれました。子どもたちと遊ぶ時、私も知っている英語で「Play tag together, OK?」と言ってみたら、「Let's play tag!」と笑顔で返してくれました。自分の言葉が通じた!ととてもうれしくなりました。全部の言葉が通じなくても、表情や動きで気持ちが伝えられることを学び、勇気を出して話してみることの大切さを知りました。ファミリーはビーチやカヌーに連れて行ってくれたり、伝統的なお菓子の Lamington を一緒に食べたり、いろいろな体験をさせてくれました。スーパーへ行った時、子どもたちは平気で裸足で歩いていました。靴を履いたまま家にあがり、逆に裸足で外に出ちゃうの?おもしろい!と思いました。最後の日には、思い出のスクラップブックを一緒に作りました。写真やシールを貼ったり、マザーが日本語で書いてくれたお手紙をはさんだりしました。大好きなファミリーと作ったこの一冊は私の宝物です。

・ド迫力のストリートアート

バンバリーにはストリートアートがたくさんありました。建物全体が一つのアートになっていて、創造的な作品は迫力がありました。その中でも私が気になったのはグラフィティという壁に描かれたアートです。世田谷で私が目にしたことがあるのは、電柱などの落書きです。それとは違い、とてもカラフルで、他のアートを引き立てるように輝いて見えました。バンバリーのグラフィティは見ていると元気になります。私は世田谷区にも、みんなで作れるストリートアートやグラフィティの場所があったらいいなと思いました。バンバリーとのコラボ作品づくりや、海外の方との交流イベントもやってみたいです。

・この体験を通して

今回の旅で、日本と全くちがう世界があることを知りました。そして、「もっと知りたい」「伝えたい」という気持ちがあれば、ちがう国の人とも心が通じ合えるとわかりました。また、バンバリーでいいなと思ったことを日本でもやってみるにはどうしたらいいかを考えるようになりました。逆に、世田谷区の良さをバンバリーの人に伝えたいです。その両方ができる人になれるよう、英語やいろいろなことを勉強、経験していきます。

緊張から感激へ バンバリーでの出会い

M.S

今回行ったオーストラリアは僕にとって初めての海外でした。僕がオーストラリアで学んだこと体験したことを2つお伝えします。

まず初め僕がこの体験を通して1番楽しかったことはホームステイでした。家は2階建てのお家でバーベキューができる広いお庭とプールがありました。家の中は日本に比べて温かくとてもリラックスした雰囲気でも過ごせました。最初は緊張したけど勉強してくれている日本語で話しかけてくれました。僕も身振り手振りでジェスチャーを使ってコミュニケーションをとっていくうちにお互いの緊張も解けてきてとてもリラックスできました。ホームステイ中は公園に行ってクリケットをして遊んだり、ビーチに行った時にはみんなで海に入りました。水族館には珍しい模様のカニ、サンゴ礁や魚など日本では見たことのない生き物が沢山いて、それらをホストファミリーと一緒に見て時間を満喫しました。この短い時間を通してみんなで観光や家での遊びなど様々な楽しいことをホストファミリーと体験しました。特に驚いたのがこのように離れた場所でもホストファミリーの方々は日本語の勉強をしてくれ、こんなに遠く離れた場所で日本語を聞くことができ感激しました。初めて会った時の緊張が楽しさ安心さなど様々なプラスな気持ちに変わりました。このホストファミリーとの貴重な時間を過ごし、僕は人が人のためにどれだけ努力しているか、初対面の人にとどのような態度で接したら仲良くなれるかを知り、僕はそのホストファミリーの温かい態度にすごく僕も温かい気持ちになり、これからの人の接し方について知りました。ホストファミリーの方も忙しいのに気持ちを込めて楽しめることを考えてくれたのがすごく伝わり、とても感激しました。



2つ目は僕はめあてで、オーストラリアで自然動物などはどのように保護する工夫をしているか調べました。そこで僕が分かったことを、コアラを例にして伝えます。まず結論から言うとコアラの保護は難しいとされています。理由は、コアラはお母さんのふんを食べないと生きてはいけないからです。なぜかというユカリの葉を消費するために微生物を取り込んでいて、そのためコアラのお母さんがいないとコアラはユカリの葉が上手く消化できなく死んでしまう確率が高いからです。そのような理由から野生のコアラの保護は非常に難しいと考えられています。

また、ユカリは1000種類以上ありその中でもコアラが食べるのは約100種類とされていて、非常にグルメなのでお母さんがいるということ以外にもコアラの保護は大変なので、とても難しいとされています。コアラを保護するにはユカリの葉がないといけなないので、動物を保護するためには自然環境を整えることも大切と思いました。地球には保護が必要な動物がたくさんいるので自然環境を大事にする取組を続けたいと思いました。

日々学び、つながる喜び!

オーストラリア派遣団引率 京西小学校 主幹教諭 猪又 菜都子

今回、海外派遣事業としてオーストラリア・バンバリー市を訪問し、子どもたちを引率する役割を務めさせていただきました。日本での学習会では、一緒に派遣団となった違う学校の友達と一緒に活動し、仲を深める中で、子どもたち一人一人が学習テーマを設定しました。子どもたちと話す中で、「自分の目で見て、肌で感じて学んできたい!」という思いを感じ、私もまた同じように考えるようになっていきました。

初めての海外で緊張する様子も見られましたが、子どもたちは新しい環境や文化に触れる中で、日ごとに積極性を増し、大きく成長していきました。現地の方々との交流に挑戦する姿や、困ったときに仲間同士で支え合う姿は、頼もしさの可能性に満ちており、この派遣が子どもたちにとってかけがえのない経験になったことを実感いたしました。

一方で、引率者である私自身にとっても、この期間は多くの学びにあふれていました。言葉が不慣れた環境では、大人よりも子どもたちの方がコミュニケーションに長けているように思います。考えてしまう分、なかなか勇気が出ず、戸惑うことも多々ありました。子どもたちの安全を第一に考えて行動しつつ、現地スタッフの方々との連携を進める中で、自分の英語力の不足を痛感する場面がいくつもありました。もっと円滑にコミュニケーションが取れば、よりスムーズに支援ができたのではないかと後悔する気持ちもあります。しかし、そんな時に助けてくれたのは、現地バンバリーのホストファミリー、スタッフの方々でした。わたしのホストファミリーであるマーフィーご夫妻には大変お世話になりました。私自身、一人でホームステイしたことで子どもたちに負けないくらいの大緊張でした。私の拙い英語でも、なんとか理解しようといつも最後まで私の言葉を待ってくれました。たくさん質問して私を知ろうとしてくれました。その心と笑顔が本当に温かくて、何度思い返しても感謝しかありません。ジュニーさんと一緒にバンバリーの街をたくさん歩いたこと、海辺のレストランでフィッシュ&チップスを食べたこと、お家のお庭でバーベキューをしたり、アランさんのジオラマを見せてもらったりしたこと、素晴らしい思い出です。そして一緒に日本から出発した派遣団の子どもたち、教員を含めた仲間たちの存在もまた大きなものでした。同じ不安を抱え、同じように挑戦していることが、私の勇気の源でした!こんなにも日本語が聞こえてくることに安心するとは思いませんでした。子どもたちが現地で見せてくれたパフォーマンスとたくさんの笑顔、そしてこの派遣を支えてくださったバンバリーと世田谷区の全ての方々に感謝いたします。

今回の派遣を通じて、私は子どもたちの成長をそばで見守る喜びと同時に、自分もまた挑戦し続ける存在でありたいと強く感じました。異文化の中で前向きに行動する子どもたちの姿は、私の考え方や意識に大きな影響を与えてくれました。今後は、これらの経験を生かし、より良い支援や学びの機会を作れるよう自校にて努めていきたいと思っております。



チャレンジした先に

オーストラリア派遣団引率 希望丘小学校 主任教諭 林 美沙季

みなさんはオーストラリアというどんな印象を持っているでしょうか。コアラやカンガルーなどの動物を思い浮かべたりする人もいないでしょうか。実際に行ってみると、コアラやカンガルーはもちろん、野生のイルカに出会うことができたり、美しい街並みのすぐ近くに海があったり、自然豊かでオーストラリアの人々の優しさと温かさに触れ、とてもすてきな場所であるということが分かりました。このようなすてきな場所で子どもたちの引率をすることにあたり、「自分の目で見て肌で感じること」「チャレンジすること」の大切さを改めて実感しました。

今回、一緒に行った14名の子どもたちのほとんどが初めての海外でした。飛行機の窓から見える景色、パースについてから見える街並み、土地の広さ、小学校訪問での体験、「わー!すごい」「どうして?」など一つ一つに目を輝かせて過ごしているのがとても印象に残っています。

子どもたちが一歩踏み出したことで、子どもたちの世界が広がっていくのが分かりました。と同時に、「日本はこうだけ」と普段当たり前だと思っていたことがそうではないことに気付く瞬間に携わることができました。これは、自分で体験しない限り、得ることができないものだと思います。

オーストラリアでのホームステイは、私自身にとってもコミュニケーションをとることがチャレンジとなりました。最初は正しい言葉じゃないと、文法はと綺麗な文を意識しすぎてしまいましたが、ホストファミリーはいつも笑顔で最後まで一生懸命理解しようとしてくれました。単語でもジェスチャーでも伝えたい思いがあれば伝えることができるということを実感しました。チャレンジした先には伝わったという嬉しさがありました。相手を理解しようと思う気持ちがあれば、言葉に壁は無いのだと思いました。

子どもたちの様子を見ていても、自分から積極的にコミュニケーションをとる姿がたくさん見られました。特に学校訪問では、声をかけるとすぐに仲良くなって会話を楽しんだり、一緒に遊んだりしていました。知っている単語、ジェスチャーであつというまに仲良くなる子どもたちのコミュニケーション力にも驚かされました。子どもたちはたった9日間でたくさんのものを目で見て肌で感じ、人の温かさに触れ、そして何事にもチャレンジしてきました。チャレンジしていく中で「会話ができた!」「伝わった」「ホストファミリーと仲良くなった!」などそのできた瞬間に携わることができたことが自分のことのように嬉しかったです。

様々な出会いの中で、派遣団の子どもたち、引率者、一つのチームとして臨んだオーストラリア。私自身にとってもかけがえのない9日間となりました。子どもたちにはこれからたくさんのことにチャレンジしてほしいと思います。派遣事業で学んだ実際に目で見て肌で感じることのすばらしさを多くの子どもたちに伝えていけるようにしていきたいです。



9 オーストリア団 派遣報告



(1) オーストリア ウィーン市 ドゥブリング区について

ウィーン市はオーストリアの首都です。東京と同じように23の区があります。ドゥブリング区は市の北西部に位置し、第19区と呼ばれています。豊かな森と美しいドナウ川に囲まれ、ぶどう畑の広がる閑静な住宅地です。音楽の都ウィーンにふさわしく、ベートーヴェンゆかりの地としても大変有名です。区内には、かつてベートーヴェンが住んでいた家や散歩した道が歴史のままに残されています。また、交響曲第3番『英雄』や第6番『田園』はこの地で生まれたといわれています。



■ドゥブリング区の概要■

面積:約 25km²

人口:約 6 万 6 千人

東京からの所要時間:約 13 時間

東京との時差:-8 時間(サマータイム期間中は-7時間)

世田谷区とドゥブリング区はともに23区の1つであること、域内に雄大な川が流れていること、緑豊かな住宅都市であること。このような共通点から、両区は1985年5月姉妹都市提携を行いました。1992年から小学生交流が始まり、それ以来、世田谷区の小学生が毎年※ドゥブリング区を訪問しています。また、教育分野以外においても、両区内の合唱団の共演コンサートなども行われています。

※・・・令和2年～令和4年度は行っておりません。



(2) オーストリア団 日程表

| 日次 | 月日 (曜日) | 発着地／滞在地 | 現地時間 | 交通機関 | 内 容 |
|----|---------------|--|---|-----------------------------|---|
| 1 | 10月18日 (土) | 区役所発 東京発 ミュンヘン着 ザルツブルク着 | 05:45 06:00 09:40 16:45 21:00 | 専用バス 航空機 専用バス 専用バス | 区役所集合、出発 羽田空港又は成田空港へ ルフトハンザ航空にてミュンヘンへ 到着後、専用バスにてザルツブルクへ移動 ホテル到着、ホテルにて夕食 (BOX) ザルツブルク 泊 |
| 2 | 10月19日 (日) | ザルツブルク滞在 | 09:00 17:00 | 専用バス | ザルツブルク市内見学 ミラベル公園・モーツァルト生家・ゲトライデ通り・レジ デンツ広場・・・ペーター家ホーエンザルツブルク城等 ホテル着 ホテルにて夕食 ザルツブルク 泊 |
| 3 | 10月20日 (月) | ホテル発 ザルツブルク発 ウィーン着 | 08:07 11:00 17:00 | 専用バス 列車 専用バス | 駅へ 列車にてウィーンへ 到着後、ウィーン市内見学 シェーンブルン宮殿 ホテル着 ホテルにて夕食 ウィーン 泊 |
| 4 | 10月21日 (火) | ウィーン滞在 | 09:00 14:00 17:00 | 専用バス | ウィーン市内見学 ウィーンの森 ベートーヴェン博物館・世田谷公園 区長表敬訪問 ホテル着 ホテルにて夕食 ウィーン 泊 |
| 5 | 10月22日 (水) | ウィーン滞在 | 09:00 17:00 | 専用バス | 学校訪問① ウィーン市内見学 ウィーン博物館・中央墓地 ホテル着 ホテルにて夕食 ウィーン 泊 |
| 6 | 10月23日 (木) | ウィーン滞在 | 09:00 14:00 17:00 | 専用バス | 学校訪問② ウィーン市内見学 シュテファン教会・ケルトナー通り散策・トラム乗車 体験等 ホテル着 ホテルにて夕食 ウィーン 泊 |
| 7 | 10月24日 (金) | ホテル発 ウィーン発 | 10:00 13:30 | 専用バス 航空機 | 空港へ 羽田空港又は成田空港へ 機中泊 |
| 8 | 10月25日 (土) | 東京着 (羽田又は成田) 東京発 (羽田又は成田) 区役所着 | 08:50 11:00 13:00 | 専用バス | 到着、入国審査、通関手続 世田谷区役所へ 帰国式後、解散 |

(3) オーストリア団 写真



空港



ミラベル庭園



ベートーヴェン博物館



世田谷公園



Musik Mittelschule Pyrkergrasse



Maria Regina



区長表敬



区長表敬



モーツァルト像



ザルツブルク駅前



シェーンブルン宮殿



現地ガイドのパセックさんとお別れ

(4) オーストリア団 児童・引率報告書

○児童報告書(五十音順)

- ・A.M. 「Austria での大冒険!人生変わった8days」

- ・I.E. 「初めてみてきて食べて話した Austria」

- ・O.S. 「見て、学んで、実感したオーストリア」

- ・G.A. 「人と繋がる鉄道」

- ・S.M. 「五感で触れたオーストリア」

- ・S.Y. 「ダンスを世界へ」

- ・T.R. 「小さな一歩が明るい未来へ」

- ・N.A. 「オーストリアから学ぶ!伝統文化とジェンダーフリー」

- ・N.S. 「オーストリアで学んだこと」

- ・H.Y. 「美味しかった8日」

- ・F.Y. 「Danke schön マリー・アントワネット」

- ・M.Y. 「都市と自然を融合させる街づくり」

- ・M.Y. 「ドナウ川の美しさ」

・M.Y. 「私が発掘したオーストリアの輝き」

・M.A. 「超超超学んだ圧巻の八日間」

・Y.A. 「Danke Österreich!」

○引率報告書

・引率 山崎小学校主任教諭 中嶋 健彦 「おおらかなオーストリアの懐に包まれて」

・引率 太子堂小学校主任教諭 岩本 加奈子 「絆を紡いだ8日間」

Austria での大冒険!人生変わった 8days

A.M.

私の人生で 1 番の大冒険が終わりました。沢山の素晴らしい経験が出来ました。特に印象に残った3つについて紹介します。

1つ目は私の研究テーマ「オーストリアに住む人々の音楽の楽しみ方」です。私は音楽が大好きです。音楽の都であるオーストリアの人々は、日本と比較してどのように音楽と関わっているのか興味をもちました。学校、地元の人との交流の機会があり、そこで勇気を出して楽しみ方を聞きました。まずオーストリアの学校では、普通コースと音楽コースがあり、自分に合ったコースで学ぶそうです。音楽コースは音楽メインで全員楽器をやります。学校の行事はクリスマスにミュージカル、合唱をやったりと日本と比較して音楽の時間は多いです。ウィーンの区長さんも良く音楽会に行くとおっしゃっていました。オーストリアの人々は、音楽が身近で生活の一部になっているということが分かりました。



2つ目は現地の人との交流です。今回の研修では、沢山のひとと交流がありました。学校訪問をした時です。折り紙を折って楽しく交流しましたが、言葉の壁を初めて感じました。オーストリアの友達には私がドイツ語が分からないということを配慮して英語で話してくれました。しかし、それにも関わらず私は英語ですら話すことができませんでした。オーストリアの友達はかなり困っていました。交流は翻訳機を使っての会話になりました。それでも十分楽しかったのですが、自分の口から色々な会話ができたら更に楽しかっただろうと悔しさが込み上げてきました。これから英語の勉強を沢山することを決意しました。

今回の交流の中で唯一通用する言語がありました。それは音楽です。音楽はオーストリアの子ども達と楽しむことが出来ました。喜び、怒り、哀しみ、楽しみは言葉で話せなくても十分に伝わりました。改めて音楽は唯一世界のどこまでも繋がる言語なのだを実感しました。やっぱり音楽を好きになれてよかったです。

3つ目は派遣団の仲間との関わりです。派遣団の友達は優しく、面白くて、賢くて信頼できる最高の仲間達でした。学習会では回数が限られ、みんなの深い部分を知る事は難しかったのですが、オーストリアで初めて内面を知る事が出来ました。現地では楽しいのが 1 番ですが、トラブルもありました。毎日一緒にいて、本音を出し合えるようになったからこそだと思います。みんなとの話し合いで乗り越え、かけがえのない成長と思い出に変えることが出来ました。沢山笑って、泣いた、8days は最高の宝物です。15 人の仲間達には心から感謝です。

最後に、この派遣を通して、いかに世界を見ていなかったことが分かりました。将来日本と外国の架け橋となる仕事に就きたいです。そのためにもまずは英語を身につけられるように努力します。改めて、教育委員会の皆様、先生方、派遣団のみんな、本当にありがとうございました! Danke schön

初めてみてきて食べて話した Austria

I.E.

私は食と音楽をテーマにオーストリアに行きました。

名物料理のウィナー・シュニッツェルはカツレツで、衣がゴリッと硬く、豚肉（本来は子牛）が柔らかくシンプルな塩味でとても美味しかったです。ザッハトルテはチョコスポンジにアプリコットジャムをサンドし、表面を濃厚なチョコでコーティングしたケーキに甘くない生クリームが添えてありました。私には甘すぎました。

オーストリアの学校は毎日音楽の授業があり、ザルツブルグの音楽祭など日本より生活に音楽があふれ、ベートーヴェンハウスやモーツァルトの生家を博物館とするなど伝統の音楽を大切にしたい思いが強くあるとわかりました。

私は興味のある食と音楽を探求したいと思いましたが、行ってみて一番印象に残っているのは世界遺産の豪華なシェーンブルン宮殿や、7～17世紀に建てられた歴史ある街並みです。写真を見て憧れたままの世界に実際に立ってみると、まるで中世ヨーロッパに迷い込んだような空気を感じその美しさに圧倒されました。昔の人の知恵と技術が詰まった素晴らしい街並みでした。

学校訪問では、想像以上にたくさん交流ができました。

1校目は10～14歳までが通う公立中学校で、現地では日本の小学5年生が中学1年生になります。そこでは音楽の授業で一緒に色々な太鼓を叩いたり、歌を披露しあったり、私たちがソーラン節を踊ったりしました。音楽が楽しいという気持ちが伝わって来ました。同じ年の子には折り紙を教えました。「東京の有名な場所はどこ？」など向こうから質問してくれ、私たちに興味を持っているとわかり嬉しくなりました。言葉が通じなくても交流することはこんなに楽しいのだと実感しました。

2校目は、19歳までの生徒が通う私立中学校で音楽と折り紙、理科の授業をしました。一緒に喜びの歌を歌ったり、ソーラン節をみんなで踊ったりしてとても盛り上がりました。音楽があれば世界中の人が笑顔で繋がれると思いました。折り紙では、わからないことを頑張って質問してくれて、折れた時はとても喜んでくれて私も嬉しくなりました。中庭に出て紙飛行機を一緒に飛ばして仲を深めました。

このような経験は普通の旅行ではできないことで、私は世田谷区の親善大使として経験することができました。機会を与えてくださったすべての方に感謝して、オーストリアの美しい自然、歴史ある街並み、暖かい人柄を忘れずに、それを多くの人に伝えて世田谷区の姉妹都市であるドゥブリング区との友好の架け橋になりたいです。

この海外派遣で日本の食や文化の良さも改めて実感しました。そして共に美味しいものを食べ、音楽を楽しみ、美しい景色を見た最高の仲間と最高の機会を共有し、交流する素晴らしさを学びました。人と接する上で大事だと思ったことは相手と自分を尊重し合い、お互いに思いやりの気持ちをもつことです。この素晴らしい経験を通して自信をもち、これからも様々な人と交流し世界で役に立てる人になる為、努力し続けていきます。



見て、学んで、実感したオーストリア

O.S.

今回海外派遣事業に参加するにあたり、「なぜウィーンが音楽の都になったか」という研究テーマを設定しました。

事前学習で、ハプスブルク家などの力のある貴族が有名な音楽家を招待して自分たちの文化力を高めようとしていたことを知りました。僕は実際にオーストリアに行って、それが果たして本当なのか自分の目で確かめようと思いました。

ウィーンに到着してまず最初に訪問したのはシェーンブルン宮殿でした。建物は非常に大きく綺麗な装飾ばかりだったし、庭はとんでもなく広くて、ものすごい財力があつたから有名な音楽家を沢山呼べたんだなと思いました。最終日に見たベルヴェデーレ宮殿もとても大きく、改めてハプスブルク家の力を思い知りました。

他にも気づきがありました。小学校訪問で音楽の授業に参加した時のことです。日本では曲を聞いた後すぐ練習に入ることが多いですが、オーストリアではリズムのとり方を楽しく教えていて、初めてでも分かり易くしてくれます。歌を歌い終わった時には皆が歓声や拍手で盛り上げてくれて、『楽しく学ぶこと』に力を入れているように感じました。ちなみに音楽の授業数は日本の6倍もあるそうです。今も昔も音楽に力を入れていることを肌身に感じ、ウィーンが音楽の都と呼ばれる理由が分かった気がしました。

また僕は自分自身の目標として、海外の人とコミュニケーションを取るというテーマも設定していました。

一回目の学校訪問の時、向こうの生徒が話しかけてくれたのにうまく反応ができなくてとても気まずい空気になりました。反省して二回目の学校訪問では好きな食べ物のことを中心に話しかけてみたら、会話も続きすごく仲良くなれました。知らない人でも相手の好きそうなことを想像すれば話ができるし、黙っているよりも自分から話しかけた方が良いということを実感しました。

もう一つエピソードがあります。僕は派遣中なんと四回もホテルでインキーをしてしまいました。インキーした時、友達に相談して僕たちだけでフロントに行くことにしました。どう説明すれば良いか分からなかったのも、身振り手振りで伝えてみたところ、なんとか鍵を再発行してもらいました。言葉が通じなくてもジェスチャーで意思を伝えることができることを学びました。その後、先生からたっぷり指導いただいたのも良い思い出です。

今回この海外派遣では本当に素敵な仲間と出会うことができました。最初はあまり話さなかった人もいたけど、行事やミーティングで自分の考えを伝えたり皆の意見を聞いたりすることでお互いの理解が深まっていき、皆それぞれ面白いところがあることを知りました。

僕はオーストリアの人が文化を大切にしているように、人の繋がりを大切にする日本の文化を大事にしていきたいです。この海外派遣事業で出会った人たちとの繋がりを学んだ経験を活かして、将来海外でも活躍できる人になりたいです。



人と繋がる鉄道

G.A.

私は今回のオーストリアの派遣で色々な国に便利かつ幸せな鉄道とは何かを調べに行きました。派遣に行ってみて分かったことが4つあります。

1つ目は日本とオーストリアの鉄道の違いです。例えばオーストリアの鉄道は、ドイツのミュンヘンからウィーン中央駅まで国境を越えた鉄道を運用しています。しかし日本では国境を越える運転ができません。国境を越えることで、さまざまな景色を見ることがや国を超えた人との交流ができる所が、日本とオーストリアの鉄道の違いだと分かりました。

2つ目は日本の鉄道の良い点やオーストリアの鉄道の良い点です。私はオーストリアの区長さんや校長先生に聞いてみました。オーストリアの鉄道は綺麗で、ある程度時間通りだそうです。日本の新幹線はとても清潔でさらに時間通りなので良いと聞きました。このことから鉄道は、世界共通で清潔だったり、時間通りだったりすることが大切だと分かりました。

3つ目はウィーンと日本の『便利さ』についてです。これは、6日目に乗った地下鉄で気づきました。日本では、チケットを改札機に通して目的地まで行く方式ですが、オーストリアではチケットを買って時刻を印字すると、そこから90分間トラムと地下鉄が乗り放題でした。私は電車にたくさん乗りたいので日本にもこの方式があったら便利だなと思いました。しかしチケットを無くすと罰金があるので、物の管理が苦手な私には不便な面もあります。また、改札も『便利さ』が違うことが分かりました。日本では、ドアにぶつかっても怪我をしないような設計になっています。オーストリアの改札は、鉄の棒を押して進む方式です。この方式は日本の改札よりもスムーズに進むことはできませんが、不正乗車を防ぐことができると思いました。

4つ目は生活環境の違いです。これはオーストリアの人との交流を通して感じました。例えばオーストリアでは、音楽の授業が多くあったり、午前授業の代わりに土曜日授業があったりするなど日本と生活環境がちがいます。オーストリアでは、学校から帰る時にも電車が使われていることを知り、「生活環境に合った鉄道」を作る基になっているなあと感じ、現地の生活環境を知ることが大切だと思いました。

オーストリアに行く前には、「日本の鉄道は世界一」と思っていました。しかし、行った後だと「歴史」や「生活環境」、「便利の違い」が多く詰まっていて「日本の鉄道もすごいが、海外の鉄道も国にあった鉄道を作っているところがすごい」と考えるようになりました。私は、これら学んだ4つを生活かして、便利で幸せな鉄道を作るヒントにしていきたいです。

最後にオーストリア団に参加させてくれたお母さんやお父さんそして引率してくれた先生やガイドさん、本当にありがとうございました。Danke!!



五感で触れたオーストリア

S.M.

「まるでグリム童話の世界のよう。」オーストリアに到着した翌朝、私はそう感じました。歴史的な街並み、道路を走る馬車、馬の蹄の音、湖畔とお城の美しい調和。ひんやりとした朝の空気を感じながら、ヨーロッパに来たという実感が湧きました。

私はピアノとバレエをやっていて、日頃からクラシック音楽に触れていることもあり、クラシック音楽の聖地オーストリアで学びたいことがありました。それは、「オーストリアの音楽環境と建築や街並みは日本とどう違うのか」です。

区長表敬訪問をした際に、区長さんがウィーンには偉大な作曲家がこの地に降り立ち、名家の前で演奏し、ハプスブルク家などの貴族が音楽を楽しむようになり、そこから市民にも広まっていったということを教えていただきました。ベートーヴェンハウスを訪ね、ベートーヴェンになりきり、時代がこちらに近づいていくにつれだんだん耳が遠くなるという体験をしました。耳がほとんど聞こえなくなっても作曲を続け、後世に名を残した名作曲家になったのは並外れた努力があったからに違いない、と感動しました。

また、オーストリアの学校では音楽の授業がとても充実していました。一週間に何度も音楽の授業があります。歌の授業の時に、先生が歌詞に合わせた動きをして子どもたちもそれに合わせて体を大きく使って動かし、歌っていました。そうした方が歌詞に感情がのって聴いている方に伝わると思いました。その後、ソーラン節を一緒にステージで踊りました。初めて聴いた曲なのに、子ども達は皆感情に任せて直感的に動いてとても楽しそうに踊っていました。

オーストリアの街は、古い建物と先進的な建物が共存していて、日本ではあまり見ないので不思議な気持ちになりました。古い教会や宮殿は長い歴史を感じさせるものでした。オーストリアは地震が少なく、古い建物を維持しやすいことや、市や区がそれを大切に扱って遺産として残していこうとする文化が根付いているからです。建物は、石やレンガを使っていて、高さも均一、細長く等間隔の窓が並び、街並みが整って見えました。街全体がタイムスリップしたように感じました。

今回の経験を通して、音楽や建築、街並みの違いだけではなく「言葉以外の繋がる力」があると学ぶことができました。以前の私は消極的で自分から話しかけるのが苦手でしたが、学校訪問を通して、言葉は通じなくても音楽や踊りで気持ちを伝え合うことができると分かりました。自分の視野をますます広げ、いつかまたオーストリアを訪れ、今回とは違った視点で楽しみたいです。最後に、困った時や不安な時も一緒にいてくれた引率の先生方、協力したり助けてくれたりした派遣団のみんな、準備をしてくれた家族に感謝の気持ちを送りたいと思います。



ダンスを世界へ

S.Y.

私はダンスを習っていて、踊ることが大好きです。以前、世界大会に出場したことがきっかけで、今では自分のダンスで見ている人々の心を豊かにすることが目標です。ダンスの発表会やレッスンで上手な方々を見る中で、実際にその場に行き行って感じる体験がとても大切だと気付きました。そこで、ウィーン市の方々と関わり、現地で大切に育ててきた考え方や生活を実際に体験したいと思い、この海外派遣に応募しました。

ザルツブルク市を出てウィーン市に到着し、初めて見る馬車や宮殿に気持ちが高まってきました。その中で印象に残ったのは、世界のクラシック音楽に影響を与えたベートーヴェンが住んでいた家でした。クラシック音楽やオペラの作曲家のベートーヴェンが、約 300 年前住んでいた家が博物館になっていました。作曲をしていたという部屋に入る

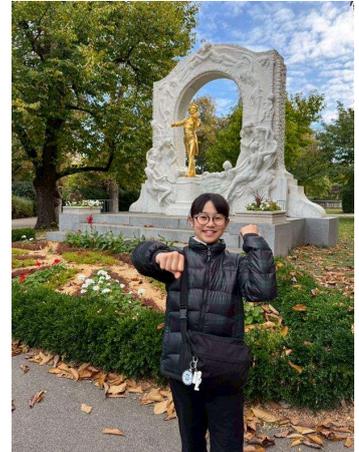
と、耳が聞こえない時に書いたと思われる、長い文章がありました。文章の内容は分かりませんでしたが、耳が聞こえなくても文章を書いていたことや濃い筆圧などを見て、自分を表現したい強い気持ちと、音楽と違った表現の仕方を追求したい気持ち、さらには音楽が好きな気持ちが感じられました。その結果、数々の名曲を残し続けたということが分かりました。私は博物館見学を通して、これまでの経験や積み重ねてきた思いをダンスで表現し続けたいと思いました。また、彼のようにどんなに大変なことがあろうと、新しい表現の仕方を追求し続け、人々の心を豊かにしたいと思いました。

さらに、5 日目から学校訪問に行きました。折り紙や細かな日本語に反応してくれた人、またソーラン節をやってみたいと実践してくれた人たちがいました。このような現地の人々の新しい表現を文化にも取り入れる姿勢が、ウィーン市のクラシック音楽を深めるきっかけになるのだと思い、ダンスへの取り組み方への刺激になりました。

シェーンブルン宮殿に行ってみると、盛大な天井画のある大広間が用意されてありました。11 月から翌年の 4 月にかけて今も舞踏会が行われているということから、常に音楽を聞いて生活していると肌で感じる事ができました。そして、クラシック音楽と電子音楽を合わせて音楽を作る取り組み、12 音技法の開拓など、ウィーン市は新しい表現を追求し続けていて、文化を育てていると分かりました。

このように、実際に行き行って現地の人々と関わったり、物を見たり生活してみたりすることはとても大切なのだと海外派遣を通じて改めて思いました。この派遣に関わってくださったみなさまに、感謝しきれません。

これからも、ダンスで世界の人々と関わる機会があります。世界中の人々の心を揺さぶるようなダンスを目指して努力を続けていきます。



小さな一歩が明るい未来へ

T.R.

「ワッティーズユアインプレッションオブジャパン？」

滞在中、私がよくくり返していたフレーズです。

海外派遣での目標は、一人でも多くの方に日本の印象を聞いて来ることでした。「ヘタリア」という、国を擬人化したアニメで海外に興味を持った私は、自分で聞いた印象を元に日本というキャラクターを作りたいと思っていました。オーストリアで実際に日本の印象を聞いてみるまでは、桜や富士山、着物などの日本を感じさせるような言葉がたくさん聞こえるのではないかと予想していました。



最初のチャンスが訪れたのは三日目、シェーンブルン宮殿を見学していた時でした。記念撮影に協力してくれた方に、私が質問できるように先生とメンバーたちが助けてくれました。緊張したし一回では通じなかったのですが、メンバーたちが励ましてくれたおかげで勇気を出して繰り返し聞くことができました。そのおかげで初めてのインタビューは無事成功させることができ、それ以降は緊張せずにインタビューに挑めました。

最初の予想に反して、協力してくれた方々の答えは、「日本」と言うよりも「日本人」をイメージした言葉が多かったです。例えば「フレンドリー」「親切」「清潔」などです。

この三つの言葉は、向こうの方達にも当てはまると思いました。なぜなら学校訪問二校目のマリア・レジーナ校の生徒の方達が、男女問わずたくさんハイタッチをしていて、クラス一団で仲よくしている姿から、とても「フレンドリー」だと感じたからです。二つ目の「親切」はトラムで隣の車両にお年寄りが乗ってきた時に、みんなが立ち上がり、手で椅子に誘導する動作で席をゆずっていたのを見たときに感じました。三つ目の「清潔」は街の綺麗さです。ザルツブルクもウィーンも、ゴミ箱が多く設置されています。そしてオーストリアでは、ペットボトルを回収装置に捨てると、25 セント返金される仕組みがあるので、そのような決まりも街の綺麗さにつながっているのではないかと思います。私は学校や地域の皆さんに、このようなオーストリアの特徴を知ってもらいたいと思いました。

私は今回の派遣団のおかげで初めて海外へ行くことができました。行く前は、日本とはまるで別世界のような気がしていました。実際に、言葉や気候、街並みなど、やはりたくさんの違いがあると感じてきました。けれども、びっくりするほどたくさんの共通点があるとも感じてきました。私がオーストリアの方を知ること、オーストリアの方に私を知ってもらうことは、私がオーストリアを知ること、オーストリアの方に日本を知ってもらうことだと思いました。

これまでの派遣団の先輩たちが積み重ねた友好の歴史に自分も一歩を重ねられて誇らしいです。私の一歩は小さいかもしれませんが、でも、小さな一歩が日本とオーストリアの交流がずっと続いていくバトンになると信じたいです。世界への興味をさらに強めてくれた美しい経験に、心から感謝しています。

オーストリアから学ぶ！ 伝統文化とジェンダーフリー

N.A.

私は、日本の神社や巫女舞のような伝統文化はあるのかということと、たくさんの音楽家と同じ街並みを見るということをテーマにオーストリアに行きました。

まず、伝統文化についてです。オーストリアに来て一番最初に「日本とは別世界のような」と思いました。景色はとても綺麗で伝統的な建物が道沿いに並んでいました。ザルツブルクやウィーンは日本の都会と異なり、高層ビルなどがなく、昔ながらの街の雰囲気大切にしていると感じました。ドゥブリング区のレッシュ区長によると、



ウィーンの街は景観を大切にしているとおっしゃっていました。東京もウィーンも首都ですが、景色が全く異なり、びっくりしました。また、シェーンブルン宮殿の中には礼拝堂があり日本でいう神社やお寺のような役割だそうです。日本の神社や寺の役割が礼拝堂だと知り、衝撃的でした。

さらに、伝統的なお祭りもありました。ある時、ひょうが降って作物ができず税金を納められなくなり、農民が皇后のところに行って減税をお願いしたそうです。叶えてくれた王様に感謝の意味でお祭りを開いたということを知り、びっくりしました。

次に、身の回りのことに大きな違いを感じました。レストランにお手拭きが置いていないのです。オーストリアは日本より乾燥していてバイ菌が少なく食事の前に手を洗う文化がないのだとか。また、道路の匂いが少し気になりました。人々は路上でタバコを吸っていました。世田谷区は、条例などがありタバコを路上で吸っている人はほとんどいません。日本では「当たり前」のことも国が異なるだけで、「当たり前」ではなくなるのだな、と感じました。また、街の中にジェンダーフリーが多いと思いました。例えばトイレのマークの色が男女とも同じということです。日本では「男子は青、女子は赤」というイメージがありますが、男女とも赤色だったり青色だったりびっくりしました。また虹色の歩道というジェンダーフリーを象徴する歩道もありました。オーストリアでは日本よりジェンダーフリーが進んでいるのだと思いました。

私はオーストリアに行って音楽家達が見ていた素敵な伝統的な街並みをたくさん見ることができました。巫女舞のような伝統文化は発見できませんでしたが、区長さんの話やウィーンの街並みを見て、日本とは違うやり方で伝統文化を大切にしていると思います。また、今までジェンダーフリーにはあまり関心がありませんでしたが、オーストリアの街並みを見て日本もジェンダーフリーをもっと大切にして街の中に取り入れていくべきだと思いました。最後になりますが、派遣団のみんな、先生方、本当にありがとうございました。

オーストリアで学んだこと

N.S.

出発の日、僕は区役所に集まった時にとっても緊張していました。なぜなら、派遣団の仲間と会っている回数も少なく、まだ顔と名前が一致していなかったからです。でも、オーストリアに着くまでの間、飛行機やバスで話すうちに、派遣団の仲間の気持ちがわかってきて、この仲間と旅ができることがとても嬉しくなりました。

僕の研究テーマは、オーストリアのシェーンブルン宮殿と、日本の伝統的な建物を比べる、というものでした。僕は建築士になりたいと思っているので、オーストリアの建物の良さを、日本の建物に取り入れたいと思っています。日本の建物はいろいろな形の木で作られているのに対して、オーストリアの建物は四角い形が多く、材料は石で作られていました。石の装飾は細かくて美しいものでした。シェーンブルン宮殿は、灰色の砂利の上にカスタード色の建物で屋根は赤紫の深い色で、広く青い空に映えていて、その美しい建物に感動しました。日本の伝統的な建物の姫路城は全体的に白が多いです。シェーンブルン宮殿は王様の家ですが、姫路城は敵から王様を守ることに特化していました。設備は隠し扉があたり客間があたりして似ているところもありました。歴史的な街並みが多く残っているのは、日本に比べ地震が少ないことと、オーストリアの方々が伝統的な美しい建物を大切にしているからだと思いました。僕はオーストリアで見たような人々を感動させる色使いの建物を建てたいです。



他に日本と違ったことは、日本の道路はアスファルトですが、オーストリアの道路は石畳だったり、トイレで「このトイレは綺麗ですか?」と、アンケートをとるタブレットが色々な場所にあたりしたことでした。

また、オーストリアの学校の人みんなフレンドリーで、年下の僕たちと対等に関わってくれて、尊敬できる人たちでした。音楽の授業の時は歌を楽しんでいて、出し物のソーラン節をアドリブで踊ってくれたりして、積極的に楽しむ姿勢を見て、僕も真似したいと思いました。折り紙の説明を僕が身振り手振りで行っていると、母国語のドイツ語ではなく僕が少しでもわかるように英語で質問してくれて、嬉しかったです。

僕はこの海外派遣事業で実際にオーストリアの街並みを見たり、人々と交流したりして心の視野が広がりました。とても素晴らしい経験になったので、他の国にも行ってみたいと思いました。もっと外国の人と関わりがもてるように英語を身につけたいです。建築士になる夢に向かって、色々な国の建物を見て学び、建築士になることができれば、日本の建物の良さも取り入れつつ、オーストリアの建物のように、見ている心が温まるような建物を作りたいです。

楽しい仲間と旅ができて、とても良い思い出になりました。オーストリアはとても良い国です。みなさんもぜひオーストリアに行ってみてください。

美味しかった 8 日

H.Y.

ザルツブルクでバスを出た時に空は広く、物語にでてくるようなきれいな景色を見て、本当にオーストリアに来た!という気持ちと同時に、いよいよ仲間たちとの旅が始まる!と、わくわくしました。そしてこの 8 日間の旅は最高な宝物の日々となりました。

この派遣事業に応募した理由は、食文化の違いを知りたいということ、友達と過ごし、仲を深めること、現地の人たちとの交流ができること、また日本では見られない景色を実際に見てみたいという気持ちからでした。そしてそれらはすべて達成でき、素敵な体験と学びになりました。



食事で印象に残っているのはカイザーゼンメルというパンです。日本でいうとご飯と同じ存在でおかずと出てきます。この違いは主食が小麦か、お米かという食文化の違いだと実感しました。ある日の昼の食事は、フリッタテンズuppeというクレープの皮を細く切ったものが入ったコンソメスープでした。見た目はほうとうのようなスープでモチモチとしてほんのり甘く、ちょっとしょっぱい初めての味でした。また、ジャガイモが食事の副菜としてよく出て来ました。とろっと甘く、塩がちょっとかかったあっさりとした味でした。ウィーン自然博物館に行き、実際に岩塩の大きな塊を見ましたが、オーストリアでは古くから良い岩塩が採れるので、きっとその岩塩が味のベースになるのではないかと思います。

この旅ではたくさんのおいしい食べ物と初めての味に出会えました。そんな初めての場所で「おいしいね。」と言いながら、友達と楽しい時間を共有できたのも、家族の旅とは違う体験であり、うれしかったです。

通りがかりで撮影に協力してくださった方へ、急きょ歌を届けることができたのも、学校訪問の時に日本の曲『翼をください』を聴きたいと言われた際、とまどうことなく歌えたのも、みんなで頑張ってきたからこそだと思います。

学校訪問に行く前は言葉が通じるか不安でしたが、実際に行ってみると身振り手振りで伝え合ったり、折り紙を一緒にやって仲を深めたりできたのが最高の思い出です。言葉が通じなくても文化を通して会話ができるということを学びました。

美しい景色、広い空、かわいらしい馬車、華やかな宮殿や街並みもまた大きな思い出です。オーストリアでは建物の高さに制限があるため空を広く感じることもできたのだと思います。眺め渡す景色を保とうとする国の取り組みがああ美しい景色につながっていて、久しぶりに日本に帰ってきた時はオーストリアの景色が恋しくなっていました。その一方でおにぎりが一段とおいしくも感じられました。家に帰って食べた白米とお味噌汁の味は忘れません。これを通して、それぞれの味覚の文化は長い歴史の上で育てられたものだと感じました。

最後になりますが、一緒に 8 日間過ごした友達、引率してくださった先生方、現地ガイドの方々、たくさんの思い出や学びある海外派遣となったことに感謝しきれません。本当にありがとうございました。

Danke schön! マリー・アントワネット

F.Y.

小さいころから私は服が大好きです。おひなさまの前で着物を着たり、プリキュアのコスチュームを着てポーズを決めたり、家の中でもお気に入りのドレスとサンダルでお姫様気分でご過ごししてしていました。七五三で着物を着たときには、気持ちを引き締まるような感覚があり、服には人の気持ちを変えられる力があると感じました。そのころから、いつか服に関わる仕事がしたいと思うようになりました。

今回の旅の一番の目的は、ウィーンにあるシェーンブルン宮殿を見学することです。「ベルサイユのばら」を読んで、初めてマリー・アントワネットという人物を知りました。そこからハプスブルク家やシェーンブルン宮殿にも興味を持ったので訪れるのをとても楽しみにしていました。写真で見ただけでも美しい建物だと思っていましたが、実際に行ってみると想像以上の迫力と華やかさに驚きました。金色の装飾や広い回廊、整えられた庭園、そして天井いっぱいに広がる絵画。どこを見ても品格があり、この場所に住んでいたハプスブルク家が国の中心としてどれほど栄えていたのかを肌で感じました。また、宮殿内にある他の肖像画を見て、私は、服が気持ちのみではなく、その人の雰囲気や立場を表すものでもあることを新たに学びました。見学を通して、建物はそこに住む人を表すもの、そして同じように、その人が身につけている服もまた、その人を象徴するものだと思いました。日本には貴族という身分の人はいたけれど、そうした衣装にふれる機会はほとんどありませんでした。今回、オーストリアに行き、西洋の華やかな文化やそこから生まれたデザインにふれ、世界が広がりました。この経験をいつか、自分なりの形で表現できたら良いなと思います。

そしてふと、今回の海外派遣のきっかけをくれたマリー・アントワネットに感謝の気持ちを込めて、似合う服をプレゼントしたいと思いました。私には高校生のお姉ちゃんがいるのですが、その制服がとてもかわいいと思います。なので、ふんわりした丈の長いドレスではなく、最近の女の子たちが着ているような制服スタイルを提案したいです。そんな制服姿のマリー・アントワネットを日本に連れ出し、東京の街を案内してあげられたら、きっと喜んでくれると思います。

この旅で、私は改めて服の持つ力を感じました。オーストリアで見た美しいデザインや色づかい、文化の豊かさを自分の中に取り入れて、いつか服を通して多くの人に笑顔やときめきを届けたいです。これからも、そんな気持ちを忘れずに、ファッションデザイナーという夢に近づいていきます。



都市と自然を融合させる街づくり

M.Y.

私はこの海外派遣に「環境に優しい街づくりとは何か」というテーマを持ち、オーストリアの様々な景観や工夫に注目し、観察してきました。

私の父は松陰神社でレストランを営んでいます。私が父のお店を手伝っていると、街の様々なお客さんが足を運んで下さいます。その方達のために私は何ができるのだろうと考え、世田谷区主催のハローキャリアワーク「松陰神社について、30年後の街をみんなで考えよう」に参加しました。同学年の友達と沢山の意見を出していく中で、「自然や環境を考えた街づくりがとても重要」ということが分かりました。

世界有数の緑豊かな都市の一つであるオーストリア。オーストリアにとっての「環境に優しい街づくりとは何か」を見てみたいと感じました。

この派遣で私が気付いた事は四つあります。一つ目はオーストリアの至る所に自然があるということです。ザルツブルクやウィーンを散策していると、誰もが遊びやすいような公園が沢山あり、すぐ近くには森も沢山あることに気付きました。二つ目は高速道路や車道の脇に、大きな木が沢山植えられていることです。一日目にミュンヘン空港から、ザルツブルクに移動する際、高速道路に乗りました。周りを見渡すと、雄大で美しく、絵画のようなザルツブルクの風景が広がっていました。三つ目は、街中に電柱が無いことです。調べてみると、オーストリアでは無電柱化が極めて進んでおり、電柱が地下に埋まっていることが分かりました。ハローキャリアワークで提案した案の一つに、「無電柱化」がありました。自分のアイデアが実現されている風景を見て、心が躍りました。四つ目は、都市でワイン作りが盛んに行われていたことです。四日目に訪れた区長表敬の際、区長さんが「19区はブドウ作りをととても大切にしている」とおっしゃられていました。19区の紋章の中心にはブドウの絵が描かれています。区として自然を生かした産業を推進し、都市の暮らしの中に畑や自然を無理なく融合させていることに感動しました。私は、幼い頃に家族でフランスを訪れ、実際にワイン作りを見学したことがあります。また、父のレストランのテラスにはブドウ棚があり、そのことからブドウ作りやワイン作りは私にとって身近で、世田谷の街づくりにも活かせると感じました。

この海外派遣を通じて、現地の学校訪問、そして、初めて親元を離れて仲間と過ごしたことで、「言語が繋がってなくても、繋がっている私たちでもやはりお互いのことを知ろうとする力は必要なのだ」と強く感じました。改めて、日本の誇らしい文化や歴史をもっと多くの方に伝えていきたいです。派遣団員の一人になることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。改めてこの事業に関わる皆さま、引率の先生方と、共に旅をした仲間。そして、勇気を出して送り出してくれた両親に感謝の気持ちを送ります。



ドナウ川の美しさ

M.Y.

僕がオーストリアに行って学んだことは4つあります。

1つ目は、展望台から見たドナウ川の景色です。僕は、ドナウ川が研究テーマの1つでした。ウィーンの森の展望台からドナウ川やウィーンの景色を見た時、1番最初に感じたのは、川幅が広いことです。日本の多摩川などと比べてみても川幅が広く、街の中にとっても大きなドナウ川が流れていてすごく目立っていました。また、ドナウ川が2つに分けられていることを疑問に思ったので、ドゥブリング区の区長さんに聞いてみると、川がよく氾濫したので、ドナウ川を「ドナウ川」と「ドナウ運河」の2つに分けて、被害を抑えることに成功したそうです。日本の隅田川もドナウ川と同じように、新しい川筋を作り氾濫を防いだという事例があります。このようにオーストリアと日本にも共通点があるのだなと実感しました。

2つ目は、シェーンブルン宮殿の豪華さについてです。私の2つ目の研究テーマはウィーンの街並みについてでしたが、中でも印象に残ったのがシェーンブルン宮殿です。シェーンブルン宮殿は外側もとても豪華で綺麗、広大な建物でしたが、驚いたのは中に入ってからでした。どの部屋も金がふんだんに使われていて、ろうそくや隠し扉、豪華なお皿や天井画などたくさんの装飾があって、ハプスブルク家の栄華を感じました。またシェーンブルン宮殿の地図を見た時に、敷地内に世界最古の動物園やたくさんの庭園があり、面積がとても大きいことがわかりました。

3つ目は、ザルツブルクとウィーンの街並みの違いについてです。ザルツブルクの街並みは、自然の地形を生かしながら建っているホーエンザルツブルク城など、自然と建物が調和していて、ウィーンに比べると金があまり使われておらず、高い建物も建っていませんでした。ウィーンの街並みは、郊外には山や森が広がっていましたが、街の中に行くと、とても高い教会のシュテファン大聖堂や、ハプスブルク家の王宮、国立歌劇場など、ヨーロッパの歴史的な建造物がたくさんあって、同じ国なのにこんなにも景色に違いがあり、両方の都市に違う魅力を感じました。

4つ目は、オーストリアが日本より進んでいる取り組みについてです。オーストリアでは、お店に空のペットボトルを持って行くと、25セントのお金がもらえるというシステムがあります。日本よりも環境への配慮に対する意識が強く、身近なものなのだと感じました。日本でも取り入れたら良いのではないかと思います。

ドナウ川と多摩川は姉妹河川なので、日本もオーストリアのように環境に配慮する意識を高め、多摩川も地域の人に愛される、綺麗な川であり続けて欲しいと願っています。



私が発掘したオーストリアの輝き

M.Y.

私はオーストリアに行って、日本にはないその国のそれぞれの良さがあることを学びました。最初は、知らない国に行くということに不安もありましたが、実際にオーストリアの地に立ち、仲間と共に様々な場所を回ることで、不安が安心に変わっていきました。なぜなら、少しずつオーストリアの文化に慣れ、友人関係も深まっていったからです。

このようにリラックスした状態で現地を訪問する中で、オーストリアの素晴らしさをたくさん見つけることができました。ここでは特に印象に残った三つのことを紹介します。

一つめは、昔からの歴史を大切にしている事です。例えば、マリー・アントワネットのお母さんが夏に利用していたシェンブルーン宮殿、モーツァルトやベートーヴェンが住んでいた家など、歴史的に価値のある建造物が今でも残っています。しかもその建造物の中に入って見学することまでできます。以前フィリピンに行ったときには、日本のお城のような建造物は残っていませんでした。そのため外国にはそのような歴史的な建造物が多くはないと認識していたので、とても意外でした。改めて考えてみると、ギリシャのパルテノン神殿やイタリアのピサの斜塔のように、昔からの建造物が受け継がれている国があります。私は、今後も海外の歴史的建造物に注目していきたいと思いました。

二つめは、差別意識を生まないための思いやりです。街の中でも男女平等を表す虹色の横断歩道や同性カップルの人たちへの寛容さを示す信号があり、ジェンダー平等の工夫が施されていました。スイスの非営利財団「世界経済フォーラム」が公表したジェンダーギャップ指数によると、148カ国の中でオーストリアは56位に対し、日本は118位です。日本は経済参画や政治参画で遅れていますが、すぐにこれらを変えるのは難しいはずですが、そのため、オーストリアの横断歩道や信号など簡単なことから取り入れて、ジェンダー平等の意識を高めていくのが良い方法だと思います。

三つ目は現地の学校での交流です。これが特に心に残っています。私は二人の生徒に折り紙を教えることになりました。オーストリアの生徒は母国語がドイツ語なので、もちろん日本語は話せません。それでも、折り紙の飛行機を教えるときに triangle という英語を使うだけで、「ああ、三角形ね!」とすごく満面の笑みで反応してくれました。そして、最後に完成した飛行機をとっても楽しそうに飛ばしてくれていて、私も気持ちが興奮して楽しくなりました。この経験を通して、言葉を使って交流するのは難しいですが、身振り手振りを使って自分の気持ちを相手に伝えることは自由にできるということを知りました。

以上のように、オーストリアには想像以上に魅力的なところがたくさんありました。今回の海外研修を通して、実際に現地に行くことで新しくその国の価値が発見できるということを学びました。今後、海外に行く機会を自分で生み出し、その国のいいところをたくさん見つけ、日本に取り入れるきっかけを作っていきたいです。



超超超学んだ圧巻の八日間

M.A.

僕のめあては、『オーストリアの人と仲を深める』でした。最初は少しおどおどしたり、なぜか知らない人に急に怒られて怖い思いもしたりしたけれど、後半では、『Danke Schön (ダンケシェーン)=ありがとう』『Guten tag (グーテンターク)=こんにちは』や、先生に『美味しいです』『さようなら』は何というかも教えてもらい、現地の言葉で積極的に現地の人と交流するようになりました。その努力が功を奏したのか、現地で出会ったトーマスさんやジャスティンさんと仲良くなれたり、中でも学校訪問で出会ったエイリアくん、ルイクン、ハリーくんやリュウリュウくんとは短い時間でしたが、折り紙を一緒に折ったり、紙飛行機を飛ばしたりして、心が通じ合ったと実感できました。



オーストリアの文化で、学校訪問の時では、オーストリアの人は『年齢も性別も全く関係ない』ということに気づきました。特に二回目に訪問した学校では、全員がフレンドリーに接してくれました。ソーラン節を披露した時も「一緒に踊りたい!」と席から立ち上がって出てきてくれて、僕たちと一緒に踊ってくれました。

このような『突破力』は日本ではあまり見かけません。日本では、空気を読むことが大切とされています。

しかし、オーストリアの人は、やりたいことに真っ直ぐで、恥ずかしがることがあまりありません。『年齢性別関係なし』がフレンドリーになれる第一歩なのではないかと思いました。

僕の研究テーマは、『食文化とオーストリアの音楽について』でした。まずは、食文化についてです。『ウィナー・シュニッツェル』について紹介します。これはトンカツのような物で、レモンをかけて食べます。かなり肉厚で、食べるのに時間がかかります。が、とても美味しいので、ウィーンイチオシのメニューです。他にもザッハトルテやカイザーロールなども美味しかったです。オーストリア料理には基本的にお米や出汁はなく、全体的に日本料理より味が濃いと感じました。

次に、音楽の文化についてです。僕は『なぜオーストリアには有名な音楽家がたくさんいるのか』ということが気になったのですが、オーストリアには、ベートーヴェンやモーツァルト、ヨハン・シュトラウスなどがいて、街中にもその影響を受けている様子が伺えました。オーストリアの方に聞いた話や、そこから想像した理由では、まずオーストリアに音楽の才能がある人が生まれ、その後に音楽の才能を活かす機会がたくさんあったからなのではと考えました。

友達のこともあまりよく知らない状態でオーストリアに飛びたったときは、不安だったのですが、次の日に朝食でみんなと仲を深め、最高の八日間になることを確信しました。

日本では味わえないような濃い体験ができて最高でした。協力してくれた方々にダンケシェーン!

Danke Österreich!

Y.A.

私はクリスマスに SDGs の本をもらったことがきっかけで、地球で長く暮らしていくために小さなことから行動する大切さを知りました。

今回の海外派遣で、SDGs の視点で学んだことが 3 つあります。まず、ウィーンでは街の至るところに等間隔でゴミ箱が設置され、家庭にもコンテナがあり、週に 2 回の収集でいつでもゴミが出せるようになっています。ゴミ箱も赤は紙、



黄色はペットボトル、カンやビン、茶色は、生ごみとしっかり分別されており、環境に優しいと思いました。次に、路面電車のトラムは入口が低く、停留所もバリアフリー化されていて、車椅子の人や足腰の弱い人も安心して利用できます。街中には虹色の横断歩道があり、これは LGBTQ という性的マイノリティの方々への尊重を示していることを知りました。オーストリアは環境や人に配慮が行き届いており、私も色々な人の個性を大切にしたいと思いました。

文化の違いについて感じたことが 3 つあります。私は日本のお城や音楽が好きで、よくお城に行ったり、チェロを演奏したりしています。オーストリアのメルヘンのような街並みやホーエンザルツブルク城を訪れた時は、とても感動しました。お城にも違いがあり、多くが山城で石造りだったり、大砲を使うため狭間が大きかったりと、文化の違いは歴史によるものだと思います。

次に宮殿です。ハプスブルク家が権威を示すために豪華な建物を多く造っており、町の至るところに立派な宮殿があることに驚きました。シェーンブルン宮殿には日本の寄木細工が残っていて、当時から日本文化が注目されていたことにびっくりしました。音楽では、ハプスブルク家が音楽家を集めたことから、モーツァルトやベートーヴェンが集まって、音楽が栄えました。貴族だけでなく一般の人々も親しんだからこそ、広がったのだと思いました。クラシック音楽が生活の中に溶け込み、馬車が街を走る景色は、日本でいう「貴族のイメージ」のようで、こういった文化を大切にするからこそ、歴史的建造物が残っているのではないかと感じました。文化の違いは歴史や環境の違いから生まれるものであり、お互いに尊重することが大切で、私たちも日本文化を守っていく必要があると思っています。

最後に、交流を通して人々のあたたかさを体感しました。シェーンブルン宮殿で写真を撮ってくれたジャスティンさん、ベートーヴェン博物館で歌を聴いてくれたトーマスさん、たくさんのことを教えてくれたレッシュ区長など、多くの方が優しく接してくれました。学校でも音楽と一緒に歌ったり紙飛行機を紹介したりして仲良くなり、最後にはハグをするほどにまでなりました。どの人も国籍関係なく明るくフレンドリーで、私もこれからは同じように人に接したいと思いました。

この交流を通して多くを学び、多くの人と仲良くなることができました。行かせてくれて、ありがとうございました。

おおらかなオーストリアの懐に包まれて

オーストリア派遣団引率 山崎小学校 主任教諭 中嶋 健彦

派遣団のメンバーが作った「イッテクッデイ!」という言葉と共に出発した10月18日。一週間家族と離れて過ごすのは初めて、という人も多く、不安もあったことでしょう。そんな気持ちを笑顔に変えてくれたのが、オーストリアの自然と文化、そして温かい方々との交流でした。

ホーエンザルツブルグ城を初めて見た時のみんなの歓声。写真の画面では味わえない迫力を肌で感じられました。ベートーヴェン広場などで出会った方々に、「喜びの歌」や「カエルの歌」をドイツ語で歌ってプレゼントしました。姉妹都市であるドゥブリング区長を応援しようと、和太鼓で三三七拍子を贈りました。どれも相手の気持ちを大切に思いやったアドリブから生まれたもの。だからこそ心に届くのだと学べた出来事です。



現地校との交流では、音楽の授業に参加させていただきました。1校目では、ウィーンの子も達の演奏に、日本の子ども達が打楽器で参加し、同じ曲をセッションの形で演奏しました。演奏後のしっとりした空気感。満足げな子ども達の表情。音楽を通して心が通い合うとはこういうことなのかと、強く感じました。

2校目では、ソーラン節の踊りにウィーンの子も達も飛び入り参加するという、思ってもみない展開に。その迫力はホールが揺れるほどです。最後のポーズ後のハイタッチ。ここでも音楽の力は、国や言語の壁を軽々と越えていきます。

どちらの学校でも、子ども達が一緒に折り紙をする時間がありました。簡単な英語でコミュニケーションをとり、鶴を完成させた時の笑顔や、紙飛行機の距離を競い合う楽しげな姿から、世界に伝わる日本文化の奥深さに誇らしさも感じました。

ウィーンでは、シェーンブルン宮殿、国立博物館、シュテファン大聖堂などの史跡を見学するたび、「ハプスブルグ家は、これほどのものを造らせたり、集めたりする力をもっていたんだ。」と「すごい!きれい!」だけで終わらない感想が増えていきました。今後、自国や他国の歴史や文化を学ぶ際、理解を深める指針を肌で学び得ていく子ども達。海外派遣の意味の大きさを改めて感じます。

「多くの人の中から選ばれた人として、ふさわしい行動をしよう。」という合言葉も自然に生まれました。共に生活する意識も高まり、部屋での過ごし方、時間への意識、本音で伝え合い理解し合おうとする姿勢、困った時に助け合う気持ち…。8日間の中で、みるみる成長し、絆を深めていく16人。これも、臨機応変な対応が求められる機会を多く体験したことや、おおらかなオーストリアの風土が、私たちを柔らかく受け入れてくれたからかもしれません。「準備が幸運につながる。」という団長の言葉通り、全員が健康に気をつけ、全てのプログラムを体験し帰ってくる事ができました、何よりの幸運です。

小学生の時にこの体験を味わえた人たちが、今後どのように世界とかがわり、人生を豊かに彩っていくのか、心から楽しみです。貴重な体験に感謝!ありがとうございました。

絆を紡いだ8日間

オーストリア派遣団引率 太子堂小学校 主任教諭 岩本 加奈子

事前の学習会では、どの児童も優しく素直、真面目であるという印象でした。「1」伝えると2も3も返ってくるので、毎回の2時間が知的・賑やかでとても楽しかったです。しかし、臨機応変が求められるという文化の中で、親元を離れる8日間…。真っ直ぐに頑張るタイプの彼らだからこそ辛くなる局面も予想できたので、楽しみと同時に支えられるだろうかと緊張を感じたのを覚えています。全員が初めてのことばかりで、事前に話せる回数も限られていたため、とにかく楽しく安心して過ごせるように心掛け、板書やタブレットのやり取りで見通しを立てられるようにしました。



派遣中には、人と繋がり合う過程や、仲間として距離が近づく様子を間近で見られ、心が大きく動く日々でした。小さなトラブルはいくつもありましたが、添乗員の中村さんに助けを求めたり、ホテルの部屋に集まって話し合ったり、物を探し回ったり、励まし合ったりして絆を深めました。「アウトプットが上手な人が集まっていると思う。この力で世の中の役に立って行って欲しい」「何があっても話し合えば乗り越えられるという繋がりが最強。それを体現できたみんなはすごい」「人は頼られると信用されると嬉しくなるらしい。人に頼ることは悪いことじゃない。勇気を出したことを認められる仲間であってほしい」「極限の状態だから、声を掛け合って助け合っていこう」「移動の時にはみんな足元まで見渡して忘れ物を防ごう」、これらを話しました。児童たちは少しでも多く学んで帰ろうと前向きに頑張りました。話し掛けること、訪問先の生徒の間に入ってコミュニケーションを取ろうとすること、ジェスチャーで粘ること、お金の使い方に悩むこと、気持ちを伝えること…。壁に向き合っている時には励まして選択を見守り、児童の挑戦に気付いた時には周囲の友達にも伝わるように知らせました。派遣の後半には、どの児童も一歩踏み出していくので、様子を共有するので必死でした。成長し合う姿は見ていてとても清々しかったです。学校訪問では、国籍や性別の壁を越えて繋がりを築く児童のたくましい姿から、この派遣経験の尊さを実感しました。

私の国際交流のめあては「日本と異なる点に気づいてくること」でした。一番印象に残ったのは、ジェンダー意識の違いです。差別をする側がむしろ相応しくないと言うメッセージを感じ、そんな学級経営をしていきたいと思いました。学校訪問では、教師という職業の文化の違いも感じた一方で、同じ立場というだけで親近感を持てたことも面白い発見でした。

最終ミーティングでは、団長から「気づいて行動まで移せる人は少ない。『する』を考えられる人に」と話がありました。大切な仲間たちは、この派遣での絆や気づきを生かして、違いを受容し、豊かで幸せな世界の為に行動「する」人になっていこうと希望を感じています。

令和7年度

第32回世田谷区小学生海外派遣事業報告書

(オーストラリア・オーストリア)

発行年月 令和8年2月

発行者 世田谷区教育委員会事務局教育指導課

世田谷区広報印刷物登録番号 No.2434